

第 15 章：ディッケンズの小説作法

1.

作家ディッケンズに捧げられる評価には、それが賞賛であれ批判であれ、必ずと言っていいほど常に何らかの保留条件がついて回っている。「すぐれてはいるが不完全な小説家」¹⁾、とフォスターはディッケンズを称して言う。又、F. R. リーヴィスは次のような定義を行なっている。

ディッケンズが偉大な天才であり、永久に古典の列に加えられていることは確実である。だがその天才は偉大な娯楽作家としてのそれであって、彼には大抵の場合、この表現に含意される以上に深刻な創造的芸術家としての責任の自覚がなかった。……………
……………
…………… 大人の精神は、ディッケンズに並外れた持続的な真剣さへの挑戦をいつも見出すというわけにはいかない²⁾。

さらに、プリーストリーの言葉を聴いてみよう。

謹厳で批判的な人は、ディッケンズを、容易に一そしてこっぴどく一過小評価するだろう。彼の欠点はけた外れだから、そんな人には多分よく目につくだろう。彼の驚嘆すべき様々な天才は、当然のものともみなされるか、あるいは無視されてしまうことさえあるかも知れない³⁾。

ディケンズに対し、このようにさまざまな矛盾した評価がなされる理由は簡単である。つまりディケンズ自身が実に矛盾に満ちた作家だったということである。手放して賞めるには彼の作品の芸術的完成度はいささか低すぎ、また無視し去ろうにも彼の天才ぶりはあまりにも強烈すぎた。人々はディケンズの天才と欠点のどちらにより多く目を向けるかによって、彼に対する評価を変えるのである。

しかし、次のことは確かに言えるかもしれない。即ち、近代の文芸批評の俎上にのせられた時、状況はいささかディケンズにとって不利になるのではなからうかということである。近代の文芸批評の流れは、明らかに、作家のあふれんばかりの想像力それ自体より、その想像力をよりよく統御してゆく能力、そしてそれによってなされ得る作品の芸術的完成の方に関心を注いでいる。作品の題材として扱われる対象が、社会全体から個人へ、又、その個人の外面から内面へと移りゆくにつれて、その傾向は当然のことながら強まってきた。それではディケンズについてはと言うと、彼がそのどちらの点でよりすぐれた作家であったかは、火を見るよりも明らかである。

小説の価値を云々するに際し、近代文芸批評の洗礼を受けてきた我々がほとんど無意識裏に頼るいくつかの試金石がある。その一例が、あのフォースターの言う、ラウンド・キャラクター、フラット・キャラクターという作中人物分類法である。⁴⁾ この分類法については、ことにフォースターが両者の間ではっきり価値判断を行なっていることについてはいろいろ異論もあろうけれども、我々現代の読者はほとんど抵抗なくこれを受け入れていると言っている。そしてこの点についてもディケンズは作家としてきわめて不運だと言わねばならないのである。

というのも、ラウンド・キャラクターに対し、より軽んじられるべき存在のフラット・キャラクターの創造においてこそ、ディケンズの天才はいかなく発揮されたからである。誰がどのように反論しようとも、やはりディケ

ンズの魅力の大いなる部分は、彼の産み出した卓抜なフラット・キャラクターたちの活躍に負うていたと言えよう。ピックウィック、サム・ウェラー、ミコーバー夫妻、ペクスニフ、セアラ・ギャンプ、或いはニクルビー夫人、その他もろもろの戯画的人物たちの存在なくしては、ディケンズの名は英文学史上決して不滅のものとはなり得なかったであろう。彼らは確かに戯画に過ぎなかったが、しかしそれは不滅の戯画でもあった。彼らの目もあやな群舞を次から次に描出している時にこそ、ディケンズの口辺には作家としての会心の笑みが浮かんでいたにちがいないのである。そこで、ここにエドウィン・ミュアの次の言葉を挙げ、フラット・キャラクターの天才的創造者であったディケンズへ謹んで捧げるものとしたい。

そもそも性格が平面的（= flat）であってはなぜいけないのか。これに対する本当の答えは、ただ一つ、現代批評の好みが多面的人物（= round characters）をよしとするという以外にないのです。次代の好みはひょっとしたら平面的な人物にゆくかもしれません⁵⁾。

2.

それでは改めてフォースターの価値基準からディケンズを眺めてみることにしよう。我々は果してどのようにディケンズ文学を評価すべきなのか。まず初めに、当のフォースター自身の評価を聴いてみなければなるまい。

ディケンズの人物はほとんどすべてが扁平（= flat）です。ピップとデイヴィッド・コパフィールドとは円球（= round）たろうとしますが、それも実におずおずとそうしていて、彼らは固体というよりも泡沫に似ているようです。だからたいていの人物は一つの文章で要

約されうるのですが、しかも人間的な深みが驚くほどに感得されます。おそらくディケンズの途方もない活力が、彼の作中人物をすこしゆり動かすのでしょう。そのため彼らは彼の生命を借りうけて、彼ら自身の生活を送っているように見えるのです。これは一つの奇術 (= a conjuring trick) です。……ディケンズの天才の一部は、類型や戯画、すなわち登場するとすぐさまそれとわかるような人物を用いながらも、機械的でない効果とあさくない人間像を達成していることです。ディケンズが嫌いな人びとには、立派ないい分があります。当然つまらない作家であるべきはずです。しかも実はわが国の大作家の一人であり、彼が類型を用いてすばらしい成功を取めていることは、きびしい批評家たちが認めようとする以上のものが扁平人物にひそんでいるかもしれないと暗示しています⁶⁾。

おなじみの保留条件付きの賞賛である。フォースターが、自己の定義とディケンズの天才の間で揺れ動いているさまが、手に取るようにわかる。考えてみればフォースターがディケンズを賞賛する時には、天才とか、作家としての力量とか、奇術などといった、定義しがたい言葉の持つ効果に頼りっぱなしで、そこに何ら論理的、分析的な説明を加えていないのである。しかし、天才には天才なりの、即ち、ディケンズにはディケンズなりの、常人には思いもつかぬような独自の的方法論が、作家自身が意識的にそれを適用したかどうかはともかく、きっと存在したのではあるまいか。

筆者自身、人物創造という点において、ディケンズが或るユニークな彼独自の方法を、半ば意識的、半ば本能的に用いていたのではないかと考えている。しかしその問題を検討するには次の点をまず明確にしておかねばならない。即ち、ディケンズの作家としての資質は、ラウンド・キャラクターを描き出すという作業には確かに不向きだったのではなからうか、ということ

である。

人物をラウンドに描くというのは、特定の個人をあらゆる複雑多様な要素の複合体として描き出すことである。いやしくもラウンド・キャラクターならば、我々に紹介されているのはその人物の自我のほんの一面、いわば氷山の一角にすぎず、彼はその描かれざる部分にさらに大きく多様化した自我の存在の全容を潜めているのだ、という印象を読者に必ず抱かせてくれるだろう。又、もしその人物の変化と成長の過程が作品の中で描かれているとすれば、その変化と成長は彼の自我の中から必然的に自ずと生じてきたものであり、決して作家の力技によって促されたものではない、ということを感じさせてくれるだろう。

ラウンド・キャラクターというものは、読者の前に、常にその複雑で測り難い姿を見せ続けている。読者は、作品世界における彼らの行動を皆目予測し得ないのである。しかし、彼らの人物創造の過程で統一性、首尾一貫性にほんの一分でも甘さやゆるみがあったとすれば、そのように創造された人物は、ラウンド・キャラクターとして読者を納得させ得るだけのリアリティーに欠けていると言わねばならない。

ディケンズの作品世界は、善と悪、聖と俗、富と貧、寛大と無慈悲、怠惰と勤勉、高慢と謙讓、などといった二元論的観念でたやすくその存在を説明してしまうことのできる単純な登場人物たちに満ちている。彼らは時として予測不可能な動きをみせたり、謎めいた言葉を吐いたりする。しかしそれは、大抵の場合、物語構成の都合上、作者ディケンズが何がしかの事実を読者に伏せておいたために生じてきた謎であって、決して人物の存在それ自体の複雑さや測り難さから生まれてきた謎ではないのである。

又、ディケンズの人物も時として、フラット・キャラクターらしからぬ深みと神秘性を帯びる瞬間があるが、惜しいかな、そういう場合はたいてい、その人物の設定に統一性と首尾一貫の点で無理があり、それが作品全体の精

密さとリアリティーを損なっていると言わざるを得ないのである（その好個の例が、『ハード・タイムズ』におけるグラッドグラインド夫人の死の場面である⁷⁾）。

ディケンズの作中人物は、フォースターの総括した通り、確かにそのほとんどがフラット・キャラクターであると言える。そして、作品それ自体の機能と効果がフラット・キャラクター以上のものを要求しない時には、それはそれで何ら問題はなかったのである。しかし、作品自身の構造と目的がその登場人物に、より複雑な多様化する自我を求め始めた時、ディケンズとて何らかの方法でこの要求に応えないわけにはいなくなっただけではないか。そこでディケンズは、自分自身の作家としての持ち味と限界をよく見定めた上で、彼なりの方法というものを半ば本能的に編み出していったのである。

それは即ち、個人の内面の複雑さとその測りしれぬ奥行きというものを、複数の登場人物の生を重ね合わせることによって描き出していこうという試みである。先程から述べているように、人間性の複雑さと測り難さを読者に伝えるには、ディケンズの人物創造のやり方はあまりにも単純にすぎ、また粗雑にすぎた。事実、ディケンズの作品においては、一人の人物の内面的葛藤が語られる部分がまことに少ないのである。善人はあくまでも善人、悪玉はあくまでも悪玉、そして旧悪を悔いた人物たちは、あまりにもお手軽に次々と改心していった。ディケンズの人物たちは、より深い、より大きい、より多様な変化に満ちた自我の存在というものを、一人一人ではとても荷いきれなかったと言える。そこでディケンズは、彼らに、いわば彼らの分身ともいべき副人物をからませ、その相補い合う効果によって、彼らに本来持てるよりはるかに大きな自我の存在を与えようとしたのである。

抜きさしならぬ形で結び合わされた二人の人物の組み合わせというものが、ディケンズの作品世界の中にはしばしば登場してくる。彼らを切り離して眺めれば、彼らはそれぞれが全くフラットな人物かもしれない。或いは荒唐無

稽にすぎたり、或いは肉づけが不足しすぎていたり、或いは首尾一貫性に欠けているかもしれない。しかしひとたび彼らが絡み合うや、そこには相乗効果とでも呼ぶべき作用によって、より複雑な、より密度の濃い生の存在が感じられるようになり、それが作品自体にも深みと充実感を与えているのである。それは、言い換えるなら、フラット・キャラクターとフラット・キャラクターをかけ合わせ、ラウンド・キャラクターを生み出すというユニークな図式である。では実際にディケンズの作品を眺めることによって、そのような人物関係の構造を探っていきたい。

3.

ディケンズの作品『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)の中で目を留めたいのは、ヴィクトリア朝功利主義を代表するような人物グラッドグラインドと、彼の妥協を知らぬ実利主義のいわば犠牲になった娘ルイザとの父娘関係である。作品自体の持つ諷刺的な意味合いにはここでは敢えて全く触れないことにしたい。というのも、ここで言及したいのはグラッドグラインドとルイザの人間としての有様そのものであって、彼らによって象徴されるヴィクトリア朝文明への批判、などといったものではないからである。

まずグラッドグラインドについて見てみよう。人格の複雑さとその内的広がりという観点から見れば、ルイザとの劇的衝突によって変貌する以前の彼には何ら注目すべき点はないと言っていい。「事実！ 事実！ 事実！」とわめきたてながら彼が作品の冒頭になだれ込んできた瞬間から、読者は彼がどのような人物であるかをただちに了解してしまう。彼は明らかに、ディケンズの喜劇的フラット・キャラクターたちの系譜に連なる人物なのである。

もちろん、いくつかの保留すべき点はある。まず彼は、子どもたちに対してちゃんと父親らしい愛情を抱いている。ただその注ぎ方をはなはだしく間違えているだけのことである。また彼は孤児となった曲馬団の少女シッ

シー・ジューブを引き取るという親切な面も見せる。ディケンズ自身の言葉を借りて言うなら、グラッドグラインドは、“it might have been a very kind one indeed, if he had only made some round mistake in the arithmetic that balanced it, years ago.” (Bk. I, Ch. 5)⁸⁾ という人物なのである。

それにしても、それらの保留特質は、グラッドグラインドの上起こったあの一大変革の納得すべき根拠とするにはあまりにも薄弱なものでありすぎる。グラッドグラインドの改心と変貌に対して、読者が抱かざるを得ない唐突の感は、これまでずっと戯画に等しい存在であった一人物が或る時点でいきなり人間らしい幅と厚みを有する、という筋の運びの強引さに対する読者として当然の疑問に端を発しているのである。グラッドグラインドは到底ラウンドな人物とは言い難い。彼の「悟り」を必然のものとするためにディケンズがはりめぐらしてきた伏線は、読者を納得させるだけの効果を充分発揮してはいない。

それでは次にルイザの方に目を向けてみよう。彼女は、グラッドグラインドに比べるとはるかに複雑に描かれた人物である。彼女の心中やその行動は時として測り難く、読者は彼女の中に近代的自我の前身のようなものを認め、錯覚に陥る。しかしながら今一度ルイザの自我の実体というものを考え直してみる時、我々は、実のところ、彼女が或る意図をもって創り出されてきた人物であるということに気づく。彼女は、いわばグラッドグラインドと彼の情を無視した功利主義とに対する批判と抗議そのものなのである。それがルイザという一人の少女の存在に体现化されただけのことである。バウンダービーとの結婚以前のルイザは、絶対的服従という逆説的な形をとってグラッドグラインドに無言の抗議をし、結婚生活に破れて彼のもとへ逃げ帰ってきた夜にはその抗議をすべて痛烈な言葉にしてグラッドグラインドにぶつけ、彼と彼の信奉してきた信念を瞬時に打ち砕いてしまうのである。

二人の父娘は、いわば一人の人間の中の相争う自我の分身であるかのよう

にそれぞれが設定されている。父が象徴しているのは自我の外向的な側面、娘が象徴しているのは自我の内向的な側面である。外向的自我は行動し決定するが自己客観を知らず、内向的自我は自己の内部に沈潜して行って行動することを知らない。グラッドグラインドは、ルイザによって目を開かされるまでは全く自己客観を知らぬ人物であった。またルイザも自分の意志で自分の行動を決定することのできぬ少女であった。だからこそ彼女は、あれほど嫌悪していた三十も年上のバウンダービーに、父親グラッドグラインドに言われるままさして抗うこともせず、嫁いでゆくのである。

グラッドグラインドとルイザの生は、ただの親子という関係を超えて、緊密に絡み合わされている。グラッドグラインドのいささか戯画めいた存在も、ルイザという影に補われることによって、複雑な意味あいを帯びてくる。グラッドグラインドにとって、その信念の崩壊はルイザの不幸によって突然にもたらされたものではなく、それは彼女の生の苦悩が始まった時点で、すでに彼の意識せぬ心の内側で徐々に進行し始めていたのである。なぜならルイザは、彼自身の苦悩する分身に他ならぬのであり、彼が自ら耳をふさいで聞こうとしなかった己自身の内なる声なのである⁹⁾。

グラッドグラインドとルイザの関係において、グラッドグラインドは或る意味ではルイザの生き方を支配しようとはしたが、その動機は本来純粋なものであり、そこに何ら利己的な目的はなかった。しかし、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861) においては、はるかに苛烈に、はるかに利己的に他人の人生に関わろうとする人々が登場してくる¹⁰⁾。ミス・ハヴィシヤムとマグウィッチがそれである。

ミス・ハヴィシヤムとマグウィッチは、ともに深い業にとらわれた人物たちである。マグウィッチはともかく、ミス・ハヴィシヤムは実に荒唐無稽な存在として読者の前に紹介される。しかし彼女は、彼女がいわば全男性に対する復讐の道具として育て上げたエステラという少女との抜きさしならぬ結

びつきにおいて、次第にその滑稽なまでに芝居がかった印象を振り捨ててゆき、ついに正しい自己客観をなし得るのである。この場合エステラは、あくまでもミス・ハヴィシヤムの変化と成長を促す触媒としての役目を果たすにすぎない。しかし彼女との結びつきがあったればこそ、ミス・ハヴィシヤムは自己客観をなし得たのであり、人間の存在自体に潜む或る悲劇的なものを読者に伝えることに成功しているのである。

ピップとマグウィッチの関係においては、グランドグラインドとルイザの間にあったあの相乗効果ともいべきものが再び感じられてくる。いまだパトロンとしてその姿を現わす前からマグウィッチはすでに、ピップの、あの子どもっぽい無邪気な、素直な、楽天的な存在の上に不吉な陰翳を投げかけている。しかしひとたびマグウィッチが姿を現わすやあれほどピップが戦慄した真の理由は、マグウィッチという人物が、ピップ自身の持っている幼稚な紳士志向に対する、グロテスクなパロディに他ならなかったからである。

しかし、やがてマグウィッチの中に秘められていた高潔さを理解するに及んで、ピップはむしろ己の中にこそさまざまな醜いものが存在していたのだという真実に目覚めてゆく。又、マグウィッチの方も、ピップへ心からの愛情を注ぐことによって、世間に対する憎悪や人々を見返してやろうとする執拗な欲望といったものをいつしか脱ぎ捨てていく。二人は、時に一人がもう一人の光になり、時に一方が他方の影になることによって、人間の中に潜むより新しい自我の可能性を、次々と読者の前に見せてくれるのである。

ディケンズの作中人物は、確かに一人一人を切り離してみればごく単純な人々だろう。しかし、ディケンズはそれらの人物を組み合わせ、何らかの抜きさしならぬ形で彼らの生を重ね合わせることによって、一人の時では生み出し得なかったより深い効果を伝えることに、彼の方法を見い出して行ったのである。あの E. M. フォースターが「ディケンズの天才」としか言いようのなかったものの本質は、このようにさりげないが、思いがけない方法に

よって説明することができるかもしれない、と筆者には思われる。ディケンズの小説作法のメカニズムを解き明かす鍵の一つがここに潜んでいるのではないだろうか。

注

- 1) E. M. フォースター、米田一彦訳『小説とは何か』、ダヴィッド社、1954、p. 82.
- 2) F. R. リーヴィス、長岩 寛・田中純蔵共訳『偉大な伝統』、英潮社、1972、p. 26.
- 3) J. B. プリーストリー、小池 滋・君島邦守共訳『英国のユーモア』、秀文インターナショナル、1978、p. 194.
- 4) Cf. E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (Edward Arnold & Co., 1927), ch. 4.
- 5) エドウィン・ミュア、佐伯彰一訳『小説の構造』、ダヴィッド社、1970；初版1954、p. 23.
- 6) E. M. フォースター、米田一彦訳、前掲書、p. 81.
- 7) 臨終の床のグラッドグラインド夫人は、大きな精神的変化と成長を遂げたものであるかのように、淡々たる自己客観に満ちたせりふを吐きながら死んでゆく。そのシーンの芸術的完成度と迫力は圧倒的である。F. R. リーヴィスも『偉大な伝統』の中で、この場面を取り上げてディケンズの天才を手放しで賞賛している。しかし、人物創造の首尾一貫性という点から考えれば、説明抜きでグラッドグラインド夫人をいきなりフラット・キャラクターからラウンド・キャラクターへ引き上げるというようなディケンズのこのやり方はいささか粗雑である。
- 8) テキストは、*Hard Times*, Norton Critical edition, 1966. に拠る。
- 9) Cf. 拙論「*Hard Times* の謎」(『近畿大学教養部研究紀要』第12巻第

第Ⅱ部 研究と考察

3号、1981年3月)

- 10) Cf. 拙論「『大いなる遺産』の人物たち」(『近代風土』第22号、近畿大学出版部、1985年2月)

第16章：E. M. フォースター『インドへの道』考

序.

英文学とインドとの関わりを思ってみる時、我々は先ず真っ先にラドゥヤード・キップリング（1865-1936）の名を思い浮かべるだろう。彼は、確かに英国人ではあったが、インドに生まれ育ち、インドという国の懐深く潜り込んで、およそ外国人の手になるものの中では最も美しいインドの物語、『ジャングル・ブック』（1894）を完成させたのである。

それと全く異なった立場から、あくまでも、統治国イギリスと被統治国インドの相剋を正面に捉え、描き出さんとしたのがE. M. フォースター（1879-1970）の『インドへの道』（1924）である。

イギリス人の一女性が、観光に行ったインドの洞窟の中で、顔見知りのインド青年に襲われるという衝撃的な事件を契機に、その事件の真相をめぐって二つの民族がすべてのエゴと感情をむき出しにして争い合う。相寄ろうとしていた魂は引き離され、再び結ばれるすべはない。

統治国と被統治国の間に流れる感情の生々しさを、完全に理解することは不可能であろうが、その問題についていささか参考になりそうなエピソードが伊丹十三のエッセーの中にある。

それから何日か経って、私はピーターと晚めしを食べにジミーズ・キッチンという店へ出かけた。この店は香港では数少ない英国風のレストランであって食物は甚だしく不味い。客は大半が英国人である。ところで植民地の英国人たちは、給仕を呼ぶのに「ボーイ」という。本国で

なら当然ウェイター・プリーズというべきところを「ボーイ」と尻上りにいうのが植民地通なのだという。ピーターは、周囲から聞えてくる、この「ボーイ」を我慢しているうちに次第に蒼ざめてきた。給仕を呼ぶ時にも、わざと聞えよがしに「ウェイター・プリーズ」と大声で呼ぶのであるが、周囲の客たちの声高な談笑に掻き消されてなんの効果もなかった。

.....
結局、ピーターはすっかり悪酔してしまった。(『女たちよ!』、文春文庫、54頁)

この、ピーターというのは、映画『アラビアのロレンス』で一躍有名になり、シェイクスピア役者としても名の高いピーター・オトゥールのことであり、語り手の私は伊丹十三である。

要するにこの場面は、名前からもわかるように生粋のアイランド人であるピーターが、「英国の鼻持ちならぬ植民地主義者根性」(同53頁)に、その「アイランド魂を刺激」(同53頁)され、怒り心頭に発するさまを、日本人伊丹十三が目撃するという筋立てになっている。長年弾圧を受けてきたアイランドの血をひくピーターは、イングランドに対して根深い恨みを持っているらしい。そしてピーター・オトゥールの、これらの英国人に対する怒り、軽蔑、嫌悪の情を、我々は心から理解することができる。即ち、統治、あるいは支配する側の最も大きな問題は、悪意の有無にあるのではなく、その羞恥心の欠如と、尊大さきままる独善性の中にあるのである。

ピーター・オトゥールが我慢のならなかったこれらの英国人たちは、『インドへの道』の中にも数多く登場する。しかし、同時にまた、ピーターと全く同じようにこれらの同胞の姿に対して嫌悪と羞恥の念を禁じ得ぬ、柔軟な心と公正な価値観を持った英国人たちも登場するのである。

そしてその後者の英国人たち、即ち、フィールディング、ムア夫人、アデラ・クウェステッドという人物像を通じて、フォースターは一体何を言わんとしていたのか、また、彼らに体现させられた人間の理想と限界とは何かを探っていくことが、続く本章の目的となる。

1.

ヴァージニア・ウルフ（1882-1941）は、「ベネット氏とブラウン夫人」と題する講演（1924年5月）の中で、E. M. フォースターをエドワード王朝（1901-1910）の作家群には入れずに、むしろウルフ自身やD. H. ロレンス（1885-1930）やジェイムズ・ジョイス（1882-1941）やT. S. エリオット（1888-1965）などと同じジョージ王朝（1910-1936）の作家群に入れている。そして、フォースターをも含めた後者のジョージ王朝期の作家たちは、前者のエドワード王朝期の作家の小説世界に対抗して書いたのだ、とウルフは主張する。

ただし、事実から言えば、ウルフの主張はむしろ強弁と言ってよい。フォースターの最後の長編小説『インドへの道』の出版こそ、なるほど1924年ではあるが、彼の他の長編小説はすべて1905年頃から1910年代の前半に矢継ぎ早に書かれたのである。『天使も踏むを恐れるところ』（1905）、『長い旅路』（1907）、『見晴しのよい部屋』（1908）、『ハワーズ・エンド邸』（1910）と書き進み、さらに1913年から翌年にかけて『モーリス』（ただし出版は死後の1971）を書き、その後はかなり間隔が空くが、1924年に『インドへの道』を完成させている。そしてなぜか、この『インドへの道』が彼にとっての最後の長編小説となる。

もっともウルフの意見は、彼女が、前者エドワード王朝の作家たち、例えばアーノルド・ベネット（1867-1931）、H. G. ウェルズ（1866-1946）、ジョン・ゴールズワージー（1867-1933）らを、文明の進歩を安易に信奉する物

質主義者として、『コモン・リーダー』（1925）の中の「現代の小説」で批判をしている事実を考え合わせれば、はっきりと納得ができる。フォースターを高く評価するウルフとしては、彼を自分の批判したエドワード王朝期の作家ではなく、ジョージ王朝期の作家グループに分類したことは至極当然なことだった。

ウルフの分類の仕方に対して、ウォルター・アレンは、『イギリスの小説』（1954）の中で、真っ向から異議を唱えている。フォースターを、ヘンリー・フィールディング（1707-1754）から始まりジョージ・メレディス（1828-1909）で終わると考えられるイギリス小説の古い伝統を引いた一人だと捉えるアレンは、ウルフがロレンスやジョイスらと同列にフォースターを並べたことに反対するのである。

ウルフとアレンのフォースター観がこのように真正面から別れること自体が、実はフォースターの文学のありようを、即ち、フォースター文学がいかにか捉えにくいかということをいみじくも物語るエピソードであろう。

ところで、今一度改めて、フォースターは1924年の『インドへの道』を最後に長編小説の筆を折ってしまったことを確認しておこう。91年にも及ぶ長い生涯にしては、長編小説はわずか六作にしか過ぎない。しかも、そのうちの一作『モーリス』は、実際には1914年に書き上げられたにもかかわらず、ホモセクシュアルな内容ゆえに、作家自身が生前出版を拒否し、1971年に死後出版という形で初めて陽の目を見た作品である。

フォースターの場合は、しかし、短編小説の存在を忘れてはならないだろう。こちらは長編小説に比べれば幾分数が多い。先ず第一の短編集『天国行き馬車、他』（1911）には六篇を、次に第二の短編集『永遠の瞬間、他』（1928）にも六篇を載せ、これらは後に『全集』（1947）として一冊にまとめられた。ただし、これら十二の作品の実際の執筆時期は、作家自身もその『全集』版の序で語っているように、すべて第一次大戦以前である。

さらに、生前は未発表のまま、死後に出版された短編集としては、『来世、他』（1972）と『北極の夏、他』（1980）とがあるが、これらは、最後の長編小説『インドへの道』出版以前に執筆されたものばかりではなく、それ以降の執筆のものもかなりあり、どうやら相当に長い期間に亘って書き継がれたものようである。現に、岡村直美は、「短篇集『来世、他』は、十四篇中七篇までが『印度への道』以降の1927年から1950年代に書かれたもので、作品の出来不出来は別としても、『印度への道』のテーマと創作動機となった理想実現への懐疑、あるいは幻滅や否定のムードが、その後どのような変貌を遂げたかを辿る貴重な資料を提供してくれる」（『フォースターの小説』、八潮出版、1981、190頁）と言う。実際、1960年代の初めにさえ、SF小説的な短編が82歳のフォースターの手によって書かれたとの指摘が、岡村直美にある（「閉塞状態」からの脱出」、『英語青年』1986年11月号所収）。

どうやらフォースターは、長編小説の形式からは離れたものの、なぜか短編小説のスタイルだけはずっと引き摺って行ったようだ。短編小説を書き継いで行ったフォースターのそのような行動軌跡を、作家の閉塞状態からの脱出の試み、と解釈する岡村直美の見解（同『英語青年』）は、筆者にも同意できる。ただ、他方において、『インドへの道』の出版後、評論、エッセー、伝記、劇作等を次々と物し、それに伴って講演やマスコミなどを通じての直接の社会的・政治的発言も増し、正に行動する作家としての側面が顕著になりだした事実を思うと、何かしら痛ましい気持ちにならざるをえない。フォースターは創作そのものから決して潔く離れてはいなかったのである。

だが、たとえその時期に短編小説を秘かに書き継いでいたにせよ、作家自身、それらを生前に公に発表する意志を示さなかった以上、1924年の長編小説『インドへの道』をもって最後の小説であると言っても、強ち間違っていないのではないだろうか。

さて、その『インドへの道』であるが、基本的にはこれまでのフォース

ターの小説と大差はない。小説の体裁は終始一貫して伝統的な写実主義であるし、又、そのような基調を成すリアリズムに、シンボリズムが微妙に入り込むという様子もこれまでと同様である。実際、このようなフォースター小説の特徴を、同時代作家ヴァージニア・ウルフはみごとに看破している。実在のマラバールの洞窟とインドそのものの魂としての意味合いの洞窟、実在の英国娘アデラ・クウェステッドと尊大なヨーロッパそのものの象徴としてのアデラ・クウェステッド、実在の優しい老女ムア夫人と予言者たるムア夫人、と言った具合に、現実と象徴という二つの相異なる相をフォースター作品の中に読み込むウルフである。そして、この二つの異なる相を接合しようとする際に、却って双方に疑惑を投げかけてしまい、結局はそこに曖昧さを感じ、きわどいところで何か不足している思いに駆られるとウルフは言う（『E. M. フォースターの小説』1927）。

だが、そのフォースター論の最後で、ウルフは、『インドへの道』がこれまでの作品とは一味違う点に注目している。

重要な個所に曖昧さがあり、象徴の不首尾な瞬間があり、想像力の手
に余るような事実の蓄積があるが、初期作品においてわれわれを悩ま
した二重の視点が単一になろうとしていたことを思わせる。飽和の度
ははるかに徹底したものである。フォースター氏はこの濃密な、ぎっ
しりと詰った観察の大群に霊的な輝きを与えるという偉大な功積をほ
とんど成しとげている。この書は疲労と幻滅の徴候を示すが、明らか
な壮麗な美しさをたたえた数々の章を含み、とくに、今度はフォース
ター氏はどんなものを書くだろうとわれわれの好奇心をそそるもの
がある。（大沢実訳、『若き詩人への手紙』所収、南雲堂、154頁）

だが、ウルフの期待にもかかわらず、皮肉なことにフォースターの最後の

長編小説となってしまった『インドへの道』であるが、誰もが作品を一読しさえすれば、マラバル洞窟事件の謎がこの作品のクライマックスになっていることに気づくであろう。

一体できごとの真相は何であったのか、アデラ・クウェステッドの言動をどう理解したらいいのか、ムア夫人の突然の変貌ぶりは何を意味するのか、などと、我々は象徴的に作品を解釈しがちとなる。これは、作者が一切の説明をしてくれていないから仕方がない。殊に、マラバル洞窟事件そのものについて描写は、明らかに意図的だと邪推したくなるほど、曖昧な描き方である。作者自身の狙いもそこにあるらしく、全知の立場の語り手として、ただ物語り、ひたすら描写するのみである。だから読み手は、ひたすらテキストに密着して考え込む。すべては読み手の自由な裁量に任されることになる。

だが筆者としては、アプローチの第一段階として、この作品の中でひととき冷徹な眼を持った人物フィールディングに注目してみたいと思っている。彼の行動軌跡に焦点を定めてみたいと思うのである。これは何も、この作品の発表時の作者の実年齢とフィールディングのそれとがほぼ同じであるという理由からではない。あくまでも、フィールディングの持っている醒めた眼と言おうか、いかなる人物からも程よく離れていて、一定の距離を保っている姿勢が、何かしら物語作者としてのフォースターのそれとイメージが重なり合うからである。加藤周一も、フィールディングのことをはっきりと「主人公」として捉えていたことを思い出す（『E. M. フォースターとヒューマニズム』、『現代ヨーロッパの精神』所収、岩波書店、1959）。ともかくも、フィールディングに先ず注目することによって、作者そのものでは決してないまでも、作家の声に幾分近い何か聞き出せるかもしれないと思うのである。

四十歳過ぎになって、インドのチャンドラポアの小さな官立大学の学長に任命されてインドにやって来たフィールディングの、それ以前の経歴はかな

り変化に富んでいた模様であるが、彼は今では、「根気強く、気持の優しい、知的な男で、教育の力を信じていた」(7章、瀬尾裕訳、筑摩書房、以下同じ)。「この世はお互いに理解しあおうとしている人間の住む世界であって、そのためには善意プラス教養と知性の助けを借りるのがいちばんよい」(7章)と信じている。ただし語り手からは、「これはチャンドラポアには不向きな信条なのだ」(7章)と言われるが。

フィールディングは「生れながらの自由人」(19章)である。「なんのレットルも貼られないで、インド国じゅうを微行しようというのが彼の目的だった」(19章)。同時に又、フィールディングは理性的でもある。マラバール洞窟事件の裁判に関しても、「イギリス人の群れは感情で行動しようと決意しているのに、彼は依然として事実を求めていた」(17章)。即ち、「理性を失うことはなかった」(17章)のである。「理性的に、冷静に行動して、問題を解決するというのが、彼のいつものやり方だった」(17章)。

このように、いかなるものにもとらわれない自由主義者で、しかも理性的な精神の持ち主でもあるフィールディングは、それゆえに、物事の本質を直視することができる。例えば、被告アジズと原告アデラ・クウェステッドの裁判が一件落着し、被告アジズは晴れて無罪にはなったものの、アジズに与えた多大の苦しみに対する償いとして、フィールディングとアデラは二人して協力してアジズあてに詫び状を書こうとしたが、どうしてもそれが書けない。その時フィールディングは、「ぼくたちが手紙をうまく書けなかった理由は簡単なのです。そして、その理由をごまかさずに直視すべきだと思います。つまり、あなたはアジズに対して、あるいはインド人全体に対して、本当の愛情は持っていないのだということなのです」(29章)と言う。さらに続けて次のようにも言う——「はじめてあなた(=アデラ)にお会いしたとき、あなたはインドを見たがっていました。しかし、インド人を見ようとは思っていませんでしたね。その時わたしはこう思ったのです——ああ、こ

れだから駄目なんだ。インド人は好かれているかいないかをよく知っています——彼らはだまされないのです。彼らは正義だけでは満足しません——これが大英帝国が砂上の楼閣にすぎないゆえんです」(29章)。これらは、しっかりとした現実認識に裏打ちされたリアリストとしてのフィールディングの一面を如実に浮かび上がらせる台詞である。

物事を直視する眼を持ったフィールディングは、常に冷静に判断する。マラバル洞窟事件の真相究明に関しても、当事者のアデラ・クウェステッドに対して、非常に論理的な分析をしてみせる。すべて彼の推論ではあるが、その論理は現実の洞察に裏打ちされて的確だ。具体的に眺めてみると、「第一に、アジズは有罪だということ、これはあなたに味方する人たちの考えです。第二には、あなたはアジズに対する告発を悪意で捏造した、これはぼくの味方の考え。第三には、あなたは幻覚に襲われている、これがだいたいぼくの考え」(26章)だ、といった調子である。アデラの幻覚説を順序立てて理詰め語るわけだが、実際この箇所は、語り手の、ひいては語り手の影に寄り添う形でくっついている作者フォースター自身の、この事件に対する解答ではないだろうか。このようなフィールディングの理路整然とした語り口は聞く人にとって説得力がある。

フィールディングが「徹底した無神論者」(27章)であった点も見落としはならない。だが、そうだからと言って、すべての現象は論理的で明晰な分析が可能、だなどと考える徹底した合理的なタイプの人物とは言い切れない。その辺は、さすがに平衡感覚を重視する作者のこと、人物をよく見て書いている。「たぶん人生は神秘的で不可解ではあるが、混沌ではないだろう。ともかくよくはわからない」(29章)というのがフィールディングの正直な本音であろう。いずれにせよ、西欧の知的な人物のイメージが色濃く付与されていることは確かだ。

フィールディングが西洋的思想の体現者の一典型ではないだろうかという

ことを一層明確にしているのは、第二部の最終章である。フィールディングは帰国の途につくが、「地中海的調和の一部分」(32章)であるイタリア・ベニスにおいて、彼は「形式美」(32章)のすばらしさに心打たれる。これはインドでは経験できなかったものである。「形式なしに美が存在しうのだろうか？」(32章)と自問する彼は今、「形式の喜び」(32章)を経験する。そして、「インドの友たちはベニスの豪華さは理解できるだろうが、その形式美は理解できないだろう」(32章)と考える。ただし、ゴドボール教授が取り行なうマウの神殿での祭祀の様子について語り手が、「この近づきつつあるインドの勝利は一つの混乱」、「理性と形式の挫折」(33章)と語る際、「われわれヨーロッパ人から見れば」(33章)(=as we call it)とわざわざ括弧つきで断わっている点を見逃がしてはなるまい。だから我々も「形式」(form)の問題を論じる場合、これにならって、「西欧的合理性を基盤とするフィールディングにとっては」と、同じく括弧つきで理解した方がよい。さもなければ、ちょうどアデラ・クウェステッドがアジズを見て彼こそがインドそのものだと思い込んでしまったのと同種の過ちを私たちも犯しかねないからである。

さて、筆者がこの作品でフィールディング像を高く評価するのは、彼の人間としての成熟度の高さゆえにである。自分とは価値観や考え方の違う人間でさえ認めようとする寛大さだと言い換えてもいい。例えば、アジズに対するお茶の会への招待であるが、一回目はアジズが出欠の返事すら出さずにすっかり忘れていたにもかかわらず、フィールディングはそれを非難するでもなく二回目の暖かい親切な招待状を凝りずにアジズに送る。又、二年ぶりにアジズに再会した折り、これまでフィールディングが出した手紙がアジズによって全く無視されていたにもかかわらず、そのことをさほど厳しくは追求しない。手紙の返事はすべてアジズがマームード・アリに代理で書かせていたわけであるから、当然もっと憤りを見せてもよさそうなのに、フィール

ディングはそうはしない。あくまで寛大である。それどころか、最後の最後まで、アジズに向かって、「なぜいま友達になれないのかね？」(37章)とさえ言う。自分の立場からのみ見れば相手は当然非難されても仕方がないといったことが世間には往々にしてあるものだが、フィールディングの場合は、自分とは違う立場のものをも認め、斟酌する。

ただしここで、フィールディングに関するフランク・カーモードの意見に耳を傾けねばならないだろう。カーモードは「象徴主義者 E. M. フォースター」(1962)の中で、フィールディングのような人物のことを、「せっかく経験をしながら、その意味をつかむことができないのだ。意図的に説明不能な形をとっている全一性がつかめないのである」(小野寺健訳、『筑摩世界文学大系 70』所収、471頁)と言う。即ち、フィールディングは地中海的な文明の尺度によってマラパールの異常さがある意味まで捉えることはできても、その異常さの本質が何かは説明できないし、あくまでも説明しようともしない、という見解である。

これは、なるほどその通りである。現に、「わたしは神秘的なものは好きだわ。でも、混乱はきらいです」(7章)とムア夫人が言うのに対して、フィールディングは、「神秘は混乱ですよ」(7章)、「神秘というと聞えはいけど、混乱の別名にすぎませんよ。どのみち、そんなことをいじくり回したところで、なんの利益にもなりません。アジズとわたしは、インドが混乱だってことを、よく心得てるんです」(7章)と言う。どうやら彼は、神秘、異常、混沌といったようなものとは縁が無いことは確かなようである。

だが思うに、フィールディングに関しては、このことは、カーモードに指摘されるまでもなく、致し方のないことではないか。なぜなら彼は、初めから、「狂気というものが理解できな」(17章)い人物だからである。すでに見てきたように、あくまでも彼は、「理性的に、冷静に行動して、問題を解決する」(17章)タイプなのだ。だから当然のこととして、彼のそのような

理性的な行動原理は、長所であると同時に短所でもあるのだ。それは、理性的な人間の限界とも言えようか。この点をカーモードは突いたわけだが、しかしそれにもかかわらず、筆者としては、フィールディング像の評価を変えるつもりはない。

フィールディングは、現実には生きているような濃厚なりアティーを我々に感じさせる人物である。イギリスによるインド支配についても、彼は政治的に過激にはならない。いやそれどころか、誠実すぎるほど誠実に対処する。一見、不謹慎で不真面目だと誤解されるかもしれないことを覚悟の上で、彼は「正直に話そう」(9章)と、心がける。決して議論において詭弁を弄したりはしない。このことなど、筆者にはむしろ好ましい一面だと思われる。

又、フィールディングは、それが彼の限界と言えるかどうかは別として、自分に対しても誠実で正直であった。この点も忘れてはなるまい。次に引用する箇所は、フィールディングの視点からの語りであるのだが、彼の正直さがにじみ出ており、同時に又、彼独特の人間関係論も披瀝されている。

『この男(=アジズ)と本当に親密な間柄にはなれないだろう』とフィールディングは考えた。それから『誰ともなれないだろう』と思った。これが到達した結論だった。彼は、インド人と親しくなれなくてもかまわないということ、援助できるだけで満足であること、彼らがいやだと言わないかぎり彼らに好意をよせるし、好意などよせてほしくないと言えれば静かに先へ進んでゆくだろうということなどを白状しなければならなかった。経験というものは役に立つものである。イギリスやヨーロッパで学んだことはすべて彼の役に立ち、明晰さに到達する助けとなった。しかし、このヨーロッパの明晰が、何か他のことを経験しようとするすると邪魔になった。(11章)

語り手のみならず、おそらくフィールディングも、ヨーロッパの明晰さの及ぼすマイナス面に気づいていたのではないだろうか。それを物語るものとして、フィールディングは同じイギリス人のアデラ・クウェステッドをもよく観察している事実が挙げられる。彼女から、「ヨーロッパ的教育の哀れな産物の一人のような印象を受け」（11章）た、と彼は言う。インドと人生を理解する際、「まるで講義でもきいているみたいに彼女は一生懸命」（11章）だ、と冷笑混じりにアデラのことを見ているところなど卓抜である。

ただし、筆者が思うに、フィールディングのような人物は、たとえ冷徹な目差しを持っているとは言え、それがあまりに鋭いばかりでもいけない。頭脳明晰すぎてもいけないのだ。なぜならそれは、人物としての現実感が稀薄になるのみならず、我々に共感を呼び起こせなくなってしまうからである。その点、フィールディングの場合は、程よくバランスを保っている。アジズに、「親しくつき合ってみると、フィールディングは、本当に心の暖かい、因習にとらわれない人だが、けっしていわゆる聡明な人ではないということがわかった。ラム・チャンドやラフィなどがいる前であんなふうに腹の中を割って見せることは危険で、粗野なことだった。それはなんの役にも立たない」（11章）と思わせるが、これゆえにこそ却って二人は友だちになれるのだ、と思われる。友情関係を保持するためには、いたずらに相手を恐れさせてもいけないのであり、それよりもむしろ、安心感を与える方がよい場合もあると思われるが、フィールディングの特質は、正にそれである。

フィールディング像は、人間や社会を見る態度において平衡感覚を持ち合わせた良識ある市井人のように筆者には思われる。確かに彼は相応の冷徹な眼を持ってはいるが、それゆえに苦悶するタイプの人間では決してない。「見る」人、「見える」人であるには違いないが、だからと言って内省的な人生態度とは無縁のようである。要は、彼は苦しみ抜くタイプの人間ではないのである。それゆえに、彼の人間洞察眼は、苦悩の中から培われた、研ぎす

まされた洞察力といった類いのものでは断じてない。結局のところ彼は、現実家的側面の濃厚な現実主義者なのである。そう言えば、彼は大学の学長ではあるが、決して学者ではないことが語り手によって何度も語られている。学者のすべてが非現実的なアカデミズムの世界に閉じ籠もる存在だとは言わないが、学問研究には現実との対応から離れざるをえない側面があることも否定はできない。そんな意味から言えば、彼はやはり学者ではない。事実、彼は文学や芸術とも無縁であり、詩の世界に耽るアジズとは対照的である。このような人物は、一步間違うと世間の嘲笑を買うことになりがちだが、フィールディングの場合は、人柄、特に寛容の態度がそれを防いでいる。それゆえに、彼の持つ現実家的側面もプラスに働き、従って、個々の現実や現象を捉える彼の眼も鋭く冴えたものとなっている。それはひとえに、彼の人間としての成熟度のおかげであろう。

だから、カーモードのように今ここでフィールディングに対して、無いものねだりをして仕方がない。個々の現実や現象を捉える眼よりも、さらにもう一段高い段階の透徹した眼を望む気持ちは、カーモード同様、わからないわけではないが、フィールディングにそれを望むことは無理であろう。なぜなら、その場合、彼の資質とは相反する側面、一例を挙げれば、芸術家的資質のようなものが求められることになるからである。

しかし作者は、フィールディングに欠けた要素を、ひょっとして同じイギリス人のアデラ・クウェステッドに付与しているのだろうか。両者の間にはやたら共通項ばかりが目につく。フィールディング同様、アデラ・クウェステッドも「論理的に物事を考える」(3章)し、「とても公平で偏見のない人」(3章)である。「神秘的なことって、大きらい」(7章)という点までも似ている。裁判終了後、「彼女の謙虚さはいじらしいほどだった。両方の側から非難されていることをけっしてこぼしたことはなかった。彼女は、それは自分自身の愚行に対する当然の罰とみなしていた」(29章)。この点からも、

彼女はフィールディングと同じく、精神面において決して未熟な人間ではないことがわかる。

このように、フィールディングとアデラ・クウェステッドとの間には数多くの共通点があることは確かなようであるが、相違点がないわけではない。フィールディングの場合は、時には腹の中を割って見せることがあるにせよ、基本的には「身軽」(11章)を信条としていることからわかるように、相手に対しても押しつけがましくはなく、いわゆるクールである。相手が「好意などよせてほしくないと言えば静かに先へ進んでゆく」(11章)のである。それに対してアデラはと言えば、「心に思っていることをはっきり口に出」(3章)し、「徹底的な話し合い」(8章)を切望する。物事を「断然はっきりさせておきたい」(8章)のである。このことだけからもわかるように、アデラの方がより一層人生に対して情熱的であり積極的なようだ。

アデラ・クウェステッドのこのような情熱と積極的な態度は、ムア夫人との比較によってもはっきりとする。ゴドボール教授の短い奇妙な歌を聞いて以来、単調な日常に明け暮れていたムア夫人とアデラではあるが、ムア夫人は「自分の無感動をそのまま受け入れたのに対して」(14章)、アデラは「自己の無感覚に怒りを感じ」(14章)、「もし退屈したら、自分を強く非難し、無理やりに口を開いて熱狂的な言葉を叫ばなければならなかった」(14章)ほどである。「いろいろな事件の起る人生の流れはすべて重要で面白いものだというのがアデラの信念だった」(14章)のである。

ミス・クウェステッドの持つ、この種の積極性は、なるほどフィールディングにはない。そんな意味では、フィールディング的資質にミス・クウェステッドの資質を加えれば、さらに理想に近い西洋人の一典型が生まれるかもしれない。そもそも二人とも、相当に成熟した人間としての特質、例えば寛大さを合わせ持っていたのであるから、ここに一層の情熱が加わるとなると、もう鬼に金棒で、ほぼ理想型の中流知識人像が誕生することになる。実際の

ところ、ゴドボール教授に代表されるインドの思想の体現者やムア夫人に代表されるインドの思想の理解者と互角に対抗しようと思えば、フィールディングひとりでは無理であり、そこにアデラ・クウェステッドも加わらなければならぬのである。

しかし、である。フィールディング像にアデラ像を加えたところで、まだまだ足りないものを感じてしまうのはなぜだろうか。それには二つの理由が考えられる。一つは、アデラの特質が情熱面においてももう一步深く踏み込んではいないという点である。もう一つは、両者とも苦しみ悩む態度が稀薄である点である。他者との話し合いにおいて、敢えて理性の壁を破り、自己暴露のレベルにまで突き進むという姿勢は、いくら人生に積極的なアデラ・クウェステッドといえどもない。又、フィールディングもそうであったが、アデラにも内省的な人生態度はほとんど見られない。インドの精神風土の理解者という象徴的意義をすっかり担わされたムア夫人の持つ特質は、アデラにもフィールディングにも縁がない。もっとも、アデラについて言えば、彼女の主要な使命はマラバール洞窟事件で大きな役割を果たすことにあるゆえ、彼女にそれ以上のものを求めること自体が無理な話かもしれない。

しかるに、フィールディング像にアデラ像を加えてもまだ足りないところを、たった一人で十全に持ち合わせている人物がいる。この人物なら、ムア夫人に負けず劣らず、混沌や神秘や非合理なるものにもきっと接近できるはずである。否、初めから超俗的・象徴的な立場に立ってしまっているムア夫人とは違って、その人は、フィールディングやアデラのような人生の実感を有した人物ゆえに、我々に与える印象はムア夫人以上のものであるにちがいない。その人の名前はミス・レイビー。『インドへの道』よりもおよそ二十年も前に既にフォスターによって創り出された人物である。彼女は短編小説「永遠の瞬間」の中で登場する。

2.

短編小説「永遠の瞬間」は、短編集『永遠の瞬間、他』（1928）の中の一冊だが、元来は1905年の『独立評論』に公表されたものである。このことは永嶋大典が教えてくれるのだが（「中産階級と人間関係——E. M. Forster 論（3）、『英国小説研究第七冊』所収、篠崎書林、1966）、この作品は倫理的深さの点から見てフォースターの後期に書かれたものではないかと推定した永嶋大典は、直接フォースターに問い合わせたことである。フォースターからの返事を踏まえて、永嶋大典は、「この短篇は五つの小説の出発点であり、また帰着点とも考えられよう。作家のテーマというものは生涯を通じて一つしかないのではなかろうか」（上掲書、73頁）と総括する。

「帰着点とも考えられよう」とは、1966年の時点にしてはかなり思い切った解釈であり、永嶋大典が作品「永遠の瞬間」をいかに高く買っていたかがこちらにもひしひしと伝わってくる。この作品はフォースター文学の縮図である、とさえ彼は言い切るのである（同71頁）。

他に「永遠の瞬間」を高く評価する人にライオネル・トリリングがいる。トリリングは、1947年の『全集』所収の12の小品のうち、「永遠の瞬間」と「コロヌスからの道」の二篇のみはファンタジー作品ではなく、しかも最も成功したものであると言う（『E. M. フォースター研究』、ホガース社、1944、35頁）。

実は筆者自身も、この短編小説を高く評価する一人である。特に、『インドへの道』との関連が、永嶋大典ならずとも強く想起される。一読すればわかることだが、ムア夫人を襲う突然の虚無感、断念といった様相が、「永遠の瞬間」のミス・レイビーの中にも明らかに見受けられるのだ。ただしその場合、終始一貫して象徴的意義を担わされているムア夫人のそれと比べて、人物造型面でもっと確かなリアリティーを付与されている分だけ、ミス・レ

レイビーの断念の様子の方が我々により一層の共感を呼びさます。次にその辺りを作品に則して眺めてみよう。

主人公の女流作家ミス・レイビーは、知性と教養のある知識人という点ではフィールディングに近いが、フィールディングが、現実家的側面があまりにも濃厚な人物であったのに対して、ミス・レイビーは、全くその逆とも言えるほどで、現に、「作家の方はいつも実際にうといもの」（米田一彦訳、英宝社、168頁、以下同じ）と、レイランド大佐の妹から言われるほどである。又、「心の思いをはっきり口に出すのが彼女の習わしだった」（199頁）という点においては、アデラ・クウェステッドに近いが、ミス・レイビーの場合はそれをさらにもっと押し進めて、「型破りな話し方をする」（155頁）ほどである。

「投げ出す値うちのある唯一つのものといえば、自分自身です」（160頁）というのがミス・レイビーの信条なのである。それゆえに「自己暴露」（self-exposure）に重きを置く。これはアデラ・クウェステッドとは明らかに違っている。「そうした正体のばくろが真の交りの唯一つの可能な基礎、階級と階級をわかた精神障壁にあけられた唯一つの門」（160頁）だと、ミス・レイビーは言う。

アデラやフィールディングと違って、ミス・レイビーは終始苦悶する。ヴォールタの村を俗化させてしまったのはひとえに自分のせいである、と己を責めて悩み続ける女性である。ミス・レイビーのそのような、苦悶ゆえにますます研ぎ澄まされた洞察力、即ち、彼女の透徹した眼は、ムア夫人の様相に一段と近づく。ムア夫人がマラバール洞窟で経験したエピファニーと同種のをミス・レイビーも経験する。旅館の女主人カンテュー夫人に二十年ぶりに再会した際、カンテュー老夫人の弱り切った身体を見ているうちに、赦しを請うこと自体を突然断念してしまう。これはムア夫人のそれと酷似している。

ひとつの「啓示」(198頁)(revelation)によって、一瞬にして事物の本質を悟ってしまう特質もムア夫人の場合に似ている。二十年前に彼女に恋をしかけた男フェオと再会して話している時にも、「突然の衝撃と今昔の対照が一つの啓示」(198頁)となってミス・レイビーを襲い、「この男を愛していないのはいまだけだ、山での事件は自分の生涯での重大な瞬間の一つだった——たぶん最も重大な、たしかに最も永続的な瞬間だった、……その幻の永遠の思い出が人生を耐え得るもの、よきものと思わせてくれたのだ」(198頁)と悟る。

ミス・レイビーが持つこの種の透徹した眼は、既に見てきたフィールディングの冷徹な眼とは幾分異なっていることをここで付言しておきたい。それは、苦しみ抜く内省的的人生態度の有無によって生じた相違であると筆者は思う。フィールディングも、なるほど伶俐な眼によって事物の本質を見抜く鋭い洞察力を持っていた。しかし、それはあくまでも実際の日常の社会的次元に限定されるものであった。日常の中産階級の社会においては大きな有効性を持ち得たにちがいないだろうが、社会的次元を超えた超自然的なレベルにおいては彼の冷徹した眼が果たして有効に機能したかどうかははなはだ疑わしい。実際、彼はムア夫人の悟りの世界とは無縁であった。しかるにミス・レイビーはと言えば、フィールディングの眼のみならず、ムア夫人の眼をも合わせ持っているのである。超俗的、超自然的な次元においても彼女の研ぎ澄まされた眼はみごとに機能する。それは、彼女の普段の苦悶する姿勢の中から生み出された一つの資質である。

このような、エピファニーを経験できるほどの透徹した眼、これが引き金となって、ミス・レイビーは悪の本質をも見抜く。かつては村も村人もすべてが純朴であったのに、いったい誰がこれらを俗化させてしまったのかという問いに対して、ミス・レイビーの視点から語り手は、「悪党がこのことをしたのではない、それは善良で富裕でしばしば利口な——そのことについて

いやしくも考えるとすれば、自分たちは自分たちの滞留することにしたどの土地にも、商売上の利益はもちろん道徳的な利益をも与えているのだと考える——紳士・淑女たちのしたことである。」(180頁)と述べる。ミス・レイビー自身も、「世の中には大して邪悪などあるのではないのかも知れませんが。わたしたちの眼につく悪もそのたいはいはちょっとしたあやまち——おろかさとか虚栄とかの結果なんです」(184頁)と言う。

ところで、悪に対するミス・レイビーのこのような考え方に対して、小説における悪を考察するアンガス・ウィルソンは、果たしてどう言うであろうか。正邪の問題にとどまっており、それをさらに突き抜けた善悪の次元にまでは達していないと批判するであろうか。「オースティン派」と自称するほどにジェイン・オースティン(1775-1817)に傾倒したフォスターらしく、ミス・レイビーの悪についての捉え方は、さすがにオースティンのそれとよく似ている。となると、オースティン文学の悪の世界を批判する立場のアンガス・ウィルソンとしてはミス・レイビーのそれをあまり高く評価しないであろうと思われる。だが、筆者としては、これまで見てきたことからわかるように、ミス・レイビーの悪についての認識は彼女の特異な眼によって捉えられたものゆえ、たとえそこにアンガス・ウィルソン好みの超俗的な要素が含まれていなくとも、高く評価できると思うのである。

ミス・レイビー像をかなり高く評価することになったが、これまでの考察を少し振り返ってみよう。先ず、『インドへの道』のフィールディング像に注目した。彼の持つ冷徹な眼と人間としての成熟度への共感が筆者の根底にあった。そしてその延長線上でアデラ・クウェステッドにも考察を加えた。だが、この二人にはムア夫人的要素が無い。そこへミス・レイビーを登場させた。

だが、事実関係は無視できない。ミス・レイビー像は1905年の創造である。『インドへの道』よりもおよそ二十年も前である。たまたま筆者は、『イ

『インドへの道』から逆に遡って「永遠の瞬間」へと帰って行ったが、フォースターの作家としての行動軌跡は、言うまでもなく、「永遠の瞬間」から『インドへの道』への移行である。この事実を忘れてはならない。

結局のところ、あのミス・レイビー像は、その後どう変遷して、最後の長編小説『インドへの道』へと至ったかを解明しなければならないだろう。

3.

かつてのミス・レイビー像が、『インドへの道』においては、二つの極——フィールディングやアデラ・クウェステッドに代表される世界とムア夫人に代表される世界——に分かれた、というのが筆者の解釈である。換言すれば、かつてはリアリズムとシンボリズム、合理的なものと非合理的なものとは一人の人物の中で渾然一体となっていたが、ここに至って分極化・対極化した、という考え方である。このように考えた時、作者は究極的には一体どちらの側に軍配を上げようとしているのかという問題に突き当たらざるをえないが、それはそう容易に結論が下せるものではない。それよりも今、我々は作品の構造をより鮮明に解き明かしたい。

「永遠の瞬間」と『インドへの道』との間にある大きな開きの一つに寛容の問題がある。『インドへの道』においては、既にフィールディングとアデラ・クウェステッドの場合を見てきたように、寛容の原理が大きな比重を占めている。主義・主張、立場を異にする他者をも容認するという態度が支配的である。そしてそれが、人間としての成熟度の根幹を成していた。ところが「永遠の瞬間」では趣を異にする。

ミス・レイビーは、既に考察を加えてきたように、彼女の中にもちろんムア夫人的要素はあるのだが、それでもやはり、寛容の人ではないと思わせる面がある。それは、彼女の「自己暴露」という信念のせいだろう。現に、レイランド大佐とのつき合いにおいても寛容の原理は働いていない。二人は、

「相手の限界や矛盾を知らないとかいうふりをしない。お互いを斟酌することさえしないといってもよい」（前掲書、168頁）といった間柄である。この描写の後に、語り手の、ひいては作者自身のストレートな心情の吐露のようなものが続く。

それは「Toleration implies reserve...」なる英文であるが、ミス・レイビーとレイランド大佐の遠慮会釈のない手厳しい交際を是認する立場からの語りと取るのが自然ゆえ、「toleration」も「reserve」もマイナス・イメージの概念となる。現に、大沢実訳は「寛大はむしろ隠し立てを意味する」（南雲堂、106頁）と、訳しているほどである。だがこれは、寛容の作家フォスターにしてみれば皮肉なことである。ひょっとして、語り手は、ミス・レイビーとレイランド大佐の立場に立つことを完全に放棄して、作者自身に近い立場に戻り、ミス・レイビーと大佐との交際のあり方を批判的に眺めた、とは取れないだろうか。そうなると「toleration」も「reserve」もプラス・イメージとなる。だが、もちろんこれは、英文の流れから考えると不自然であり、おかしい。前者の解釈が正しいと考えて間違いないだろう。

話は少し脇に逸れたが、「永遠の瞬間」においてだけでなく、『インドへの道』においても、寛容に関して一つのヒントになる説がある。それは既に本論においても触れた加藤周一の「E・M・フォースタとヒューマニズム」という論文である。加藤周一は、先ず、フォースターの世界は公的（社会的）な面と私的（個人的）な面とははっきり分けられている、と解釈する。その際、一方に通用する原理は必ずしも他方には通用しないということをしかと強調する。そこで、寛容の問題に触れて、フォースター文学における寛容の原理は「社会的な面では重要であるが、私的・人格的な交りのなかでは必ずしも最高の原理とは考えられていない」（前掲書、220頁）と看破する。さらに、「芸術的創造は、——そして多分一般に創造なるものは、——良識と寛容の問題ではない」（同225頁）と言って、寛容な人物では決してない画

家ゴッホの例を出す。

ミス・レイビーとレイランド大佐の交際はまさしく私的・人格的なものであり、そしてミス・レイビーは創作に携わる小説家であるという点に鑑みた場合、加藤周一の論はみごとなまでにそっくりそのまま「永遠の瞬間」の解釈にも当てはまる。それゆえ、「民主主義的寛容の原則が、個人的な人間関係ではそのまま最高原理として通用するのではない」（同226頁）という加藤周一の公式を当てはめれば、先程の「toleration」や「reserve」の問題もはっきりと結着がつく。

次に、フィールディングやアデラ・クウェステッドといった人物たちの寛容はどうなるのか。この二人は、被支配国インドと支配国イギリス、東洋の文明と西洋の文明、といった政治的・社会的な状況の中に置かれていて、その中で特に、フィールディングとアジズ、アデラ・クウェステッドとアジズとがそれぞれ関わりを持つのである。このことから言えば、政治的・社会的領域での寛容の原理の重要性を説く加藤周一の論が、この二人の場合にもそっくり当てはまるのである。又、加藤周一は政治的・社会的領域での信念の否定に触れているが、そう言えば、フィールディングは「身軽」な人物であった。

ところで、ムア夫人についてはどうであろうか。彼女は、インドの精神を「ちらっと垣間見」（5章）る役割を担った人物であり、それこそ加藤周一流に言うところの私的な面においても公的な面においても誰とも深く関わりを持たないから、寛容に関してもこれまでの人物たちのようなわけにはいかない。加藤理論も当てはまらない。象徴的意義を担わされているがゆえに、肌を感じられるような人生の実感は持たないが、作者自身のこれまでの価値観とは大いに異なる、まるでインドの精神風土の体現者たる風貌さえ帯び始めるムア夫人と寛容の問題を、一体どのように解釈したらよいであろうか。

人間関係を重視する立場のフォースターが、ムア夫人には人間関係を断念

させている。彼女は「人間は重要だが人間と人間の関係は重要でないとますます強く感じるようにな」(14章)る。「わたしたちが人生の支えにしている個人的な人間関係も束の間のものだ」(29章)と思い、「人生に対する執着を根底からゆり動か」(14章)され、「一切は空であるという幻想に身を任せ」(14章)てしまう。「キリスト教徒らしい優しさも消えて」(22章)いく。

このようなムア夫人像創造と作家自身の思想とが微妙に絡み合っているにちがいないことは容易に想像ができる。作品上梓前の二度のインド訪問や、作品に記された献辞からもわかるように、インド人マスードとの17年にも及ぶ友情関係が、作家に思想の変容を迫り、そこから特異なムア夫人像が生み出されたことは間違いないだろう。

ムア夫人の吐く次の言葉が、取りも直さず、ムア夫人と寛容の問題を解き明かす鍵のように筆者には思われる。

「わたしは善くはありません。むしろ、悪い人間です」ムア夫人は前より穏やかに言って、またペイシェンスをはじめた。そして、ランプをめぐりながら言った、「悪い老人です。悪い、悪い、とても悪い。……でも、あなたがたが罪のない彼(=アジズ)を苦しめる手助けはしませんよ。悪にもいろいろあるわね。でもわたしは、あなたがたの悪よりわたしの悪のほうがいいと思っているの」(22章)

象徴的意義を担わされているイメージが濃いムア夫人にあって、彼女のこの言葉は、千鈞の重みを持って我々に迫ってくる。なぜなら、「永遠の瞬間」の中でミス・レイビーが我々に語った悪の認識と、『インドへの道』におけるこのムア夫人の認識との間には、かなり大きな差があることを感じずにはいられないからである。「悪」(evil)についての認識の差、これこそが、「永

遠の瞬間」と『インドへの道』との差、とさえ言い切れる程である。とにかく、普通一般には決してほめられたものではない傍観者の態度も、ムア夫人にあつては、それも立派な寛容の態度となるのである。

寛容の原理に関して、これでとうとう三つの様相が出そろった。ミス・レイビーに代表される芸術家タイプにとっての寛容の持つ意味、フィールディングやアデラ・クウェステッドに代表される政治的・社会的生活を営む人々にとっての寛容の持つ意味、そしてムア夫人に代表される虚無主義者にとっての寛容の持つ意味である。作品『インドへの道』では、もちろん、フィールディング・アデラ型寛容と、ムア夫人型寛容とが鎬を削っているのだが、筆者としては、ムア夫人によって提示された、悪についてのあのみごとな認識に鑑みて、ムア夫人型の寛容に軍配を上げたい。

しかし他方では、ムア夫人によって新たに発見された寛容の原理の根底にある虚無主義の中に、理性や歴史への信頼を放棄する姿勢があまりにも強く感じられるゆえ、理性から非理性、合理から非合理へと飛翔したムア夫人、そしてそれを描いたフォースターにも、再び、非合理なるものを統御したいと望む日は来ないのであろうか、と思わざるをえない。実際のところ、ムア夫人も、そして作者フォースターも、そんなに潔く西欧の知的伝統の枠組みから脱し切れるであろうか。1920年代から30年代へと時代は大きなうねりを見せる中、混沌、神秘、懐疑、非合理へと赴いた彼らの魂の行く末に思いが行く。

だが、少なくとも作品『インドへの道』のメッセージは、やはり、ムア夫人の説く悪についての特異な認識と、彼女が身をもって示した寛容の原理と考えるのが妥当であろう。現に、第1部第4章で既に、語り手の影に寄り添う作者は、「人間がみずから思いたって自分たちの統一を企てても、おそらくは徒労に終るだろう。それどころか、その企てはかえって人間同士を隔てる溝をいっそう広げるだけなのだ」と言っている。「おそらくは」(perhaps)

という言葉からも窺われるように、この語りは、一見、断定を避けようとする優柔不断の印象を読者に与えがちではあるが、筆者には却って、作家の誠実な声として響く。フォースターを良心的知性の作家として捉えるアーノルド・ケトルも、『インドへの道』論の最後で、『彼の小説の中核にあって、たえず安易な一般論形成をちくり、ちくりと牽制し、分析しつくした人間関係にいまだ予言不可能な要素があることを暗示する、あの「おそらく」「たぶん」という言葉を、われわれは単に自由主義者の臆病を示すものとして片付けることはできない』（『イギリス小説序説』、小池・山本・伊藤・井出訳、研究社、358頁）と述べている。筆者はこれに全く同感である。

「ムア夫人＝ゴドボール教授という材料をめぐってどこことなく感じられる曖昧さ」（アーノルド・ケトル、同 357頁）は確かにあるかもしれないが、それでもなおかつ、ムア夫人が知り得た特異な悪の認識と寛容の精神が精彩を放っているのは、実はその根底にフィールディングに代表される堅固なリアリティーを有した人物がしかと控えているからである、という点を最後に改めて強調しておきたい。後のエッセー“*What I Believe*”（1938）の冒頭の“I do not believe in Belief.”とも思想的につながっていくムア夫人独自の認識が読者にひときわ強く迫り来るのは、人生の実感を有した人物フィールディングの巧みな描写があったればこそである。このように、『インドへの道』は、終始一貫して象徴的意義を担わされており、それゆえに本来はリアリティーに欠けるはずのムア夫人のエピファニーが、イギリス小説の伝統とも言うべき堅固なリアリズムによってみごとに支えられている作品である。

第 17 章： *The American* に関する一考察

序

「動かない固定した相」と「動き発展する相」、つまり「静の相」と「動の相」との二面性からヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の *The American* (1877) 論¹⁾ を展開してみようとするのが本論の目的である。

これは、「完結した相」と「変化する相」と言って良いかもしれない。とにかくこの二面間の緊張の効果が、劇的なこの小説の真髄であると思う。「多様な性格と風俗を鮮明に示すところの人物典型の不変性」と「作中人物の内発的進行性」との緊密な様相である。

小説を面白くするためにはあらゆる物語をドラマタイズしなければならないと考えるジェイムズであるが、特にこの *The American* には劇的な場面がある。しかしジェイムズの場合のドラマはあくまで頭の中にあるドラマである。ヨーロッパの歴史的伝統世界がアメリカ人の意識にどんな衝撃を与えてそれを拡大させるかという質のものである。この点を考察していきたい。

1.

F. R. リーヴィスは、*The Great Tradition* (1948) 第3章 'Henry James' に於いて、*The American* の主人公クリストファー・ニューマン (Christopher Newman) に関して、「彼の名前が示す通り、彼は作者ジェイムズの非常に積極的で意味深い意図を体しているのである。彼の名前はクリストファー・コロンバスを想起させ、ニューマンなる姓は、名は体を表わすである。ジェイムズはつまり、彼に特別の象徴的価値を持たせようとしている。彼こそ次

の質問に対する解答なのだ。ヨーロッパの流れを汲むもの——海を渡ってもたらされた遺産——を切り離し、取り除くと、アメリカが貢献したものとして一体何を我々は提示することができるか?」と説く²⁾。つまり、リーヴィスは、主人公ニューマンの象徴的役割を考え、彼によって代表されている「エネルギーと、妥協しない道徳的活力と、率直な意志の力」(energy, uncompromising moral vitality and straightforward will)³⁾ という象徴的意義を中心にして、この作品をひとつの道徳的寓話として考えている。

リーヴィスの指摘を待つまでもなく、なるほどこの作品は、ヨーロッパの場面の中に現われたアメリカ人の性格の典型を考察したものである。寓話作者としての任を担ったジェイムズは、アメリカの性格を読みとろうとする読者に対して、読みやすいシーンを提供する。話のはじまりの第1章での主人公ニューマンの悠々とした姿勢、体格、顔つきは、正に典型的なアメリカ人のそれである。国民の型というものを見分ける眼識のある人ならだれでも、彼がアメリカ人であるのに気づかないはずがないと、ジェイムズは言明している。ニューマンの出身地は明らかにされてはいないが、彼の西部色濃厚な身の上話から考えて、ヤンキー寓話がその基礎となっていることは確かである。⁴⁾ とにかく、このスケールの大きい典型的なアメリカ人が悠々たる足どりで、ヨーロッパに踏みこんでくるのである。

ニューマンは「偉大な西部の野蛮人」(the great Western Barbarian) (Ch. 3) である。純真でたくましく、踏み出してきて、哀れな衰えはてた旧大陸をしばらくじっと眺め、それからさっと襲いかかろうとする (stepping forth in his innocence and might, gazing a while at this poor effete Old World, and then swooping down on it) (Ch. 3)。正に「翼を広げた鷲」(the spread eagle) (Ch. 6)⁵⁾ であり、鷲が翼を広げた以上、その翼を使わなくてはいけないのである (The spread eagle ought to use his wings.) (Ch. 6)。そこで彼は、クレール・ド・サントレ (Claire de Cintré) を助け出さんが

ために飛んで行き (fly to the rescue of Madame de Cintré) (Ch. 6)、襲いかかって、爪でひつつかんで、かささらって来よう (pounce down, seize her in your talons, and carry her off) (Ch. 6) とする。「翼を広げた鷲」という表現とアメリカの紋章との関係を今更述べる必要もないであろうが、「クリストファー・ニューマン」という彼の名前と同じく、彼がアメリカ人という国民的な類型に属する人物であることを我々に教えてくれる象徴的表現である。「合衆国は世界で一番偉大な国で、ヨーロッパなんか全部そのズボンのポケットに入れてしまうことができる」ときっぱり言う (he finally broke out and swore that they were the greatest country in the world, that they could put all Europe into their breeches' pockets) (Ch. 3) 程の征服欲である。そして彼は最上のものをヨーロッパに求める。「人間として得られる最大の楽しみ。人間、場所、芸術、自然、あらゆるもの。一番高い山、一番青い湖、一番すばらしい絵、一番きれいな教会、一番有名な人物、一番美しい女性」が彼の求める対象となる (I want the biggest kind of entertainment a man can get. People, places, art, nature, everything! I want to see the tallest mountatins, and the bluest lakes, and the finest pictures, and the handsomest churches, and the most celebrated men, and the most beautiful women.) (Ch. 2)。これまで事業で忙しくて結婚する相手を探せなかったから、ヨーロッパでこそ心も容姿も美しく高貴な女性と結ばれたいと言い、「市場で最良の品物」(the best article in the market) (Ch. 3) としての女性を手に入れたいとも言う。非常に卑俗で俗悪な実利主義、物質主義が感じられる表現ではあるが、ニューマンには金権主義的な横柄な態度は全くない。彼は本質的に無垢なる者である。

「ぼくの成功を完全なものにするには、ぼくの築いた財産の上に、記念碑の上部を飾る華麗な像のように、美しい女性がのっけてはならない」
(To make it perfect, as I see it, there must be a beautiful woman perched

on the pile, like a statue on a monument.) (Ch. 3) と公言するニューマンを主人公とするこの小説は、それゆえ、構成的にはニューマンとクレールとのラブストーリーとなっている。「翼を広げた鷲」がクレールをめがけて襲いかかる話である。この鷲は、果たしてうまく獲物を捕えることができるかどうか。実は、そこに立ちはだかるのがヨーロッパの歴史と伝統の厚い壁である。

この小説は単なるラブロマンスでは決してない。ニューマンとクレールとの恋愛事件をストーリーの中心に置き、テーマはアメリカとヨーロッパの風俗習慣の対比であるが、この小説はそれだけではないと思う。さらにもう一歩進めて考えなければならない。つまり新しいタイプの間人であるニューマンが、古いヨーロッパ貴族社会との対決を通じて、人間形成・意識の深化を成し遂げたかどうかという点である。なるほど、この作品では、ヨーロッパ体験によるアメリカ人の人間形成というテーマはまだ十分には掘り下げられてはいないが、この考察を抜きにしてこの作品の道徳的価値云々は不可能である。そして実際、この問題に入り込むことによって、今まで分りやすかった作品世界が、途端に分りにくいものに変貌するであろう。粗野と単純の中にもそれゆえの活力と誠実さのあるアメリカの性格と、伝統と高い文化の底に潜む人間的腐敗墮落を有するヨーロッパ的性格との対立概念は、いわば、人間関係にしても例えば市民社会のような具体的な共同体の中で如実に描かれていくのではなく、描象化された人間関係がイデーみたいにあってそれが探られていく感じのものであり、こういう事物の把握の仕方は、やはりジェイムズのだとは思う。そして特にこの作品の場合、このような、文化の根が浅くそれだけに無邪気で素朴であるアメリカ社会と、深い伝統を誇るとはいえ内面的には腐敗墮落をまぬがれぬヨーロッパ社会との相対関係の考察は適切だと思う。だがさらに重要なのは、ニューマンがヨーロッパから何かを学び得て自己認識を成し得たかどうかという事である。36才にしてすでにあ

り余る富を蓄積し、やりたい事業は何でもやり、これまでは全く顧みる余裕の無かった「教養」を求めてヨーロッパにやってきたニューマンが、精神発達ないし人間形成を成し遂げたか否かを次に考察していきたいと思う。

2.

アメリカ独立宣言は、単にイギリスだけでなくヨーロッパの歴史からの完全な断絶を示すものであった。かつてアメリカとヨーロッパの関係は、共通の歴史的伝統に支えられていた。共通の社会的基盤があった。ところが両大陸間の革命的断絶以後、両者間の文化的関係は、政治的・地理的分離以上に離れてしまった。ヨーロッパと離別することによってアメリカは、ヨーロッパのような古い伝統ある文化的遺産のないことを強く意識しだした。このような意識を抱くアメリカ人が、ヨーロッパにこそ自分たちの文明の源流があることを認識し、ヨーロッパに渡るのである。なるほど、この認識に至る前には、アメリカにとどまってアメリカ的現在⁶⁾の中に身を置くべきか、それともヨーロッパに渡ってヨーロッパ的過去に身をゆだねるべきか、大いに迷ったことであろう。実際、ヨーロッパ的過去とアメリカ的現在との間の距離は決定的なものであった。ヨーロッパの意義深い過去を望むアメリカ人は、ヨーロッパへ渡るのである。ヨーロッパの過去は、かつては自分たちの過去であったからである。人間の個人的過去を重視し、過去から現在への時の経過において自己を把握しようとする人間にとって、ヨーロッパ行きは必須の条件であった。過去から断絶されたアメリカ的現在を、何とかしてヨーロッパ的過去と接続させることによって、「時」の連続的展開における自己認識の過程を描いたのが、つまりビルドゥングスロマン（教養小説）⁷⁾である。アイデンティティの認識の物語である。故国アメリカの土地を去り、文化教養を旧大陸に求めつつ人間形成を築いていくのである。このビルドゥングスロマンのパターンに沿ってニューマンの人生遍歴を考えることができる。以

下の考察において、Granville H. Jones の *Henry James's Psychology of Experience* (1975)⁸⁾が筆者にとっては大いに参考になった。その著作の中でも特に、直接の *The American* 論としての 'The Education of Christopher Newman: Naïveté, Materialism, and Renunciation' は好論文である。

'innocent and great expectations' を胸に抱いた 'the great Western Barbarian' である主人公ニューマンが、経験の結果生じる 'alteration and deprivation' つまり不成功に終わる挫折を通じて、自己省察の眼が鋭くなっていくと、その論文は述べている。ニューマンは変わったのである⁹⁾。(Christopher Newman has been converted: he is civilized and closed, grizzled and wrinkled and aged. *The American* recounts the process of Newman's coming to awareness. The result is his renunciation of naïve, ignorant, grasping, petty self-aggrandizement.)¹⁰⁾ 人生に大いなる期待の念を抱いて人生の旅に立った主人公ニューマンが、さまざまなつまずきに出会って、結果的に精神発達したのである。

普通、ビルドゥングスロマンと呼ばれる小説の主人公は、終始一貫して感受性の鋭い青年として設定されているものである。実際、チャールズ・ディケンズの『大いなる遺産』(1861)の主人公ピップなど神経がピリピリしていて、恐ろしい程の鋭い感受性を具えていた。ところが、ニューマンの場合は、'sensibility' の欠如から出発していると、上述の Jones は指摘するのである。典型的アメリカ人を象徴するという役割を担った人物ゆえに、そのような性格設定になったのであろう。このような典型化を志向する「静」の様相が、作品 *The American* が青年の人間形成を主題とする「動」の相の「教養小説」の規定にすっぽり入らない理由なのであろう。一青年の成長発展という側面と同時に、やはり彼には、ヨーロッパのベルガルド家 (the Bellegardes) の 'sophistication' に対する 'innocence' の象徴という任務があったからである。

ここで、ニューマンの 'innocence' が持つ積極的価値と否定的な面とについて考えてみたい。彼の来歴を物語っている目は、'innocence' と 'experience' が奇妙にまじり合っている目で、お互いに矛盾しあうさまざまなものを示唆していた。

It was our friend's eye that chiefly told his story; an eye in which innocence and experience were singularly blended. It was full of contradictory suggestions, and though it was by no means the glowing orb of a hero of romance, you could find in it almost anything you looked for. Frigid and yet friendly, frank yet cautious, shrewd yet credulous, positive yet skeptical, confident yet shy, extremely intelligent and extremely good-humored, there was something vaguely defiant in its concessions, and something profoundly reassuring in its reserve. (Ch. 1)

実際、彼はヨーロッパの社会や文化については 'innocent' で 'ignorant' ではあったが、生まれながらの経験主義者 (experimentalist) (Ch. 2) であった。どのようなのっぴきならない立場に立たされた時であっても、つねに何かしら楽しみ (something to enjoy) (Ch. 2) を見い出した。このように、彼の 'innocence' は 'experience' と切っても切れない関係にあるのだが、その 'innocence' の場合、プラスの側面とマイナスの側面の両面について考えてみなければならない。マイナスの側面は、ニューマンの 'crudeness' や 'social ignorance' に通じるイノセンスである。ベルガルド家の厚い壁の前に倒れるのは、彼のこのようなイノセンスに拠る。荒々しいそのようなイノセンスを前にすれば、ベルガルド家の連中でなくとも思わず眉をひそめてしまうであろう。このようなイノセンスを失くしていく過程に人間の精神的発達を考え

る Jones は次のように述べている。

Newman is at ease in Europe because he is insensitive, because he is unaware; he is confident because he is ignorant. What happens in *The American* is that Newman loses his innocence: he is forced by the Bellegardes to realize that his view of existence is simplistic; it is inadequate to cope with the forms and tastes of civilized society.¹¹⁾

洗練されていない 'crudeness' に通じるイノセンスに、実はニューマン自身は気づいてはいない。彼の 'sensibility' の欠如であるが、これがいわゆる彼のイノセンスのイノセンスたるゆえんであろう。やがては自分の粗野なイノセンスに気づき、それを認識することによって、ニューマンが 'social education' を達成したと論を進める Jones は、それゆえにニューマンのイノセンスを全く評価しない。しかし彼も、ニューマンのイノセンスは絶対的なものではなく相対的なものであると言っている (his innocence is relative, not absolute)¹²⁾。このことは、次にニューマンのイノセンスのプラスの側面を考える場合の話の糸口となる。つまり、上述の如くバルガード家によって代表される 'sophistication' がプラスイメージになった時にニューマンのイノセンスがマイナスイメージになったのとは全く逆で、彼らの 'sophistication' がマイナスイメージになる時にニューマンのイノセンスはプラスイメージとなる。言い換えればこれは、典型的アメリカ人、それもきわめて理想化された原始人像をさす 'noble savage'¹³⁾ に通ずるところの 'the great Western Barbarian' としてのニューマンのキャラクターを好ましいものとしてプラスのイメージで理解する場合の基礎となるイノセンスである。「動の相」から見て、ニューマンが人間形成を成し遂げるためにはイノセンスを失くすべきであると考えるのとは全く逆に、今度は「静の相」から見て、ニューマンに

よって代表される典型的性格を好感のもてるものと考えられる際のイノセンスである。

以上、ニューマンのイノセンスが持つ肯定的な面と否定的な面とについて考えてみたわけだが、さてどちらに軍配を上げるかとなると、やはり結局は、「人物典型の完結した相」と「人間形成という変化する相」との間の二面的関係を慎重に考察しなくてはいけなくなる。イノセンスの問題は、このように両者間の橋渡しをする程に重要なのであるが、究極的にこれは、イノセンスの問題を引き金にして「静の相」と「動の相」との関係に移行する。つまり、作品 *The American* を、典型的性格を表わす寓話小説のようなものとして読むか、あるいは主人公の人間形成をたどる教養小説として読むかという事になってくる。普通この作品は、ジェイムズの小説群中において、第一期の国際状況のテーマを扱った一連の作品の中から第一に挙げられるものである。旧大陸には無い、新大陸生まれの「新しい人間」のタイプ、特に「善良なるアメリカ人」のタイプを描いた作品として読まれることが多い。つまり、「静の相」から眺めた読み方である。筆者の場合、先にも述べたが、ヨーロッパ対アメリカという図式的読み方ではなく、ヨーロッパに渡ったニューマンの、希望から幻滅へ行きつく認識過程のパターンで読みたいし、それが必要だと思う。そのような認識過程を経てはじめて、主人公の意識のドラマが展開するからである。つまり、筆者は、「変化する相」から眺めた読み方をとる。なぜなら、「善良なアメリカ人」を表わしているにせよ、ニューマンの性格はあまりに無神経すぎると思われるからである。ただし、次の二つの箇所から、ニューマンの性格の良さの不変性をはっきりと感じることは可能だ。まず一つは、トリストラム夫人がニューマンに『どうか辻褃の合わないことはしないでほしい』(Only, for Heaven's sake, let him not be incoherent.) (Ch. 23) と頼む箇所であるが、これは結局ニューマンが 'coherent' な人物であることを却って強調する表現である。もう一つは、小

説の最終頁であるが、ニューマンの 'good nature' が印象強く読者の胸に残ることになる。

“My impression would be that since, as you say, they defied you, it was because they believed that, after all, you would never really come to the point. Their confidence, after counsel taken of each other, was not in their innocence, nor in their talent for bluffing things off; it was in your remarkable good nature! You see they were right.” (Ch. 26)

さて次に問題にしたいのは、彼の 'insensibility' に関してであるが、彼がこれまで一度も言語の働きというものについて考えてみたことはなかった (Newman had never reflected upon philological processes.) (Ch. 1) という点が重要な意味を持つ。彼の感受性の欠如と教養の無さであるが、これは彼の言語意識の無さに最も多く基づいているのではないと思われる。例えば、彼が繰り返し使用する「すばらしい」(magnificent, handsome, splendid) という形容詞がある。求める女性は「すばらしい」女性であらねばならぬし、住む部屋も「すばらしい」という形容詞がふんだんに使えるような部屋であらねばならぬと言うのである。なるほど 'magnificent', 'handsome', 'splendid' などと異なった形容詞を使ってはいるが、「最良の物」(the best article) (Ch. 3) を求め、「第一級の物を手に入れたい」(I want to make a great hit) (Ch. 3) という彼の気持ちがそのままストレートに表現になったものであり、これはかなり無造作な使用である。

“My wife must be a magnificent woman.” (Ch. 3)

“We know a good many pretty girls, thank Heaven, but magnificent women are not so common.” (Ch. 3)

For the rest, he was satisfied with the assurance of any respectable person that everything was “handsome.” Tristram accordingly secured for him an apartment to which this epithet might be lavishly applied. (Ch. 6)

“Goodness, beauty, intelligence, a fine education, personal elegance — everything, in a word, that makes a splendid woman.” (Ch. 8)

このような言葉使いが、彼の単純明快な人生信条から来ているのは言うまでもないが、それにしても少なくとも自分の妻にしたいと思っている理想的女性に対する epithet として、事物に対するのと同じレベルで「すばらしい」の一点張りでは読者はちょっと首をかしげたくなる。ニューマンは、巨大で複雑な様相のバリを目の前にしても、彼の想像力が刺激されるようなことは決してない、そんな男である。

The complex Parisian world about him seemed a very simple affair; it was an immense, amazing spectacle, but it neither inflamed his imagination nor irritated his curiosity.) (Ch. 3)

想像力の乏しい男が言語意識に欠けているのは当然であろう。想像力であれ、言語意識であれ、感受性に乏しい人間の目は、対象を見抜くことができない。例えば、老侯爵夫人マダム・ド・ベルガルドと向かい合って、お互いに相手の正体を見抜こうとする (Madame de Bellegarde looked at him with her

cold fine eyes, and he returned her gaze, reflecting that she was a possible adversary and trying to take her measure. Their eyes remained in contact for some moments. (Ch. 10)。対象を見透す力において、どちらが優っていたかとなると、やはり老侯爵夫人の方である。既に引用したところの、小説の最終章の最後の箇所での事は明らかにされる。ニューマンが秘密を暴露したりなど決してしない人物であることは、彼女によって既に見抜かれていたのである。彼女のこのような鋭い目は、実際のところ、侯爵を殺した目であり、ヴァランタン (Valentin) を監視する目である。

“You know my lady’s eyes, I think, sir; it was with them she killed him; it was with the terrible strong will she put into them. It was like a frost on flowers.” (Ch. 22)

“I live,” he added with a sigh, “beneath the eyes of my admirable mother.” (Ch. 7)

娘のクレールも母を恐れている (I am afraid of my mother.) (Ch. 18) が、おそらく母の目が恐いのであろうと思われる。

鋭い目は、老侯爵夫人だけでなく、マドモアゼル・ノエミ・ニオシュ (Mademoiselle Noémie Nioche) にも与えられている。すべてを意識している鋭い目 (conscious, perceptive eye) (Ch. 1) である。この二人の鋭い目は、ニューマンの目を対照的に浮かび上がらせる効果を持つのである。決して鋭くはない目を持ち、感受性も繊細ではないニューマンが、人生は安楽なものであるべきだという信条 (his prime conviction that a man’s life should be easy) (Ch. 5) を持って、完全に打ちくつろいだ態度 (a sort of air you

have of being thoroughly at home in the world) (Ch. 7) を示しながら、ヨーロッパへやって来るのである。教養の無いニューマンが教養を求めての旅である。

“I am not cultivated, I am not even educated; I know nothing about history, or art, or foreign tongues, or any other learned matters. But I am not a fool, either, and I shall undertake to know something about Europe by the time I have done with it.” (Ch. 3)

教養なんてくそくらえだと吐き捨てるように言うトリストラムとの比較において、ニューマンの教養願望は熱烈なものである。

“I don't care for pictures; I prefer the reality!” And Mr. Tristram tossed off this happy formula with an assurance which the numerous class of persons suffering from an overdose of 'culture' might have envied him. (Ch. 2)

言い換えれば、精神向上 (improve his mind) (Ch. 5) の為の旅である。ニューマンは、結果的には、「自分は何者であるか」という自己省察を深めていくのであるが、その過程が、「紳士とは何であるか」というジェントルマン・イデアールの模索を通じてなされていく。つまり、ジェントルマンの理念型の探求という構造を取って、ニューマンの「教養の旅」は押し進められて行くのである。その諸相について次に詳しく検討したい。

3.

ニューマンは全くの自由の身である。マドモアゼル・ノエミも羨む程であ

る。わずらわしいものは何一つない。子どもも妻も婚約者もない。しかもその自由は、いざとなれば帰ることの保障された自由である。ニューマンによって、紳士修業のためにと作り出された自由である。それゆえ、さしあたり彼の人間形成期間中は完全に自由である。

“I have made over my hand to a friend; when I feel disposed, I can take up the cards again. I dare say that a twelvemonth hence the operation will be reversed. The pendulum will swing back again. I shall be sitting in a gondola or on a dromedary, and all of a sudden I shall want to clear out. But for the present I am perfectly free. I have even bargained that I am to receive no business letters.” (Ch. 2)

紳士たる者、働くことはしないのである。つまり、勤勉を旨とし生産にはげむ中産階級的価値の否定像が紳士であり、そしてそのような紳士の完璧な姿が、ベルガルド家に代表されるフランスの貴族であるというような信念で、ニューマンの紳士修業の旅は始まるのである。しかし、ニューマンのお手本となっている紳士像は、むしろダンディー像と言い換えた方が適切であり、そのような有閑階級の人たちはダンディーでこそあれ、果たして真の紳士であるのかは疑問である。真の紳士像であってはじめて、その修業は人間形成の修業につながるのであるが、ニューマンがスタートを切った「紳士の旅」は、道徳的価値という観点から、前途が非常に多難であることが十分に予想される。ブルジョワジー活動の一切と無縁で、ひたすらオペラなどの洗練された趣味を楽しむという無為徒食の自由を大いに謳歌しようとしているニューマンは、そのダンディー志向が徹底しているだけに、読者には滑稽に見える。ヨーロッパへ来る前は、努力と活動が呼吸と同じ程に自然であった

彼 (Exertion and action were as natural to him as respiration) (Ch. 2)、即ち、勤勉の権化であった彼が、今度は趣味の権化を希求するのである。アメリカ西部での真面目で、勤勉であった時の姿こそが、ひょっとして真の紳士像ではなかったかと、ニューマンにそっと呼びかけたくなる程である。いずれにしてもこのようなところからニューマンの修業は始まる。

彼は、今までの「勤勉」の裏返しで、「怠惰」の特質をまず見せる。

“... I have thrown business overboard for the present. I am ‘loafing’, as we say. My time is quite my own.” (Ch. 10)

しかし元来が怠け者ではないだけに、なかなかうまくは行かない (I am not an idler. I try to be, but I can’t manage it.) (Ch. 10)。彼は ‘elegant leisure’ を持ちあぐねている。非生産的の怠惰な生活は、どうも彼には苦手らしい。

“I am a good worker,” Newman continued, “but I rather think I am a poor loafer. I have come abroad to amuse myself, but I doubt whether I know how.” (Ch. 2)

そこで退屈な生活が始まる。今までの意欲的であったであろうアメリカの生活とは逆である。実際、ヴァランタンとユルバン・ド・ベルガルド侯爵夫人は、それぞれ、退屈でたまらないという生活を長くし続けている。

“I have a great many *ennuis*; I feel vicious.” (Ch. 11)

“I am bored to death. I have been to the opera twice a week for the last eight years.” (Ch. 17)

ヴァランタンなど、これまで何もしてこなかったし、何もできないのである (“I have done nothing — I can do nothing!”) (Ch. 7)。

憧れの紳士になるためのそのような御膳立てが揃うと、いよいよ紳士修業の試練として、女性の試練にニューマンは遭遇する。得体の知れぬ美しい女性 (strange, pretty woman) (Ch. 6) であるクレール・ド・サントレに魅せられてしまう。陽の世界の人間ニューマンが、陰の世界の女性クレールに恋をする。事実、彼女の表情には、明るくて華やかな光はない。

Her clear gray eyes were strikingly expressive; they were both gentle and intelligent, and Newman liked them immensely; but they had not those depths of splendor — those many-colored rays — which illumine the brow of famous beauties. (Ch. 6)

ニューヨーク版全集につけた「序文」の中で作者自身も認めているように、クレールの描写が弱く、彼女の微妙な手がかりを読者の手に明確には提供しなかったとのことである。¹⁴⁾ しかし、この「ほやけた姿」は、彼女の性格造型においてむしろ作者によって積極的価値を与えられているものと考えたい。ニューマンの人間形成途上において彼が遭遇する「試練」としての役割を担わされたクレールは、必然的に、残酷なまでに美しくて何かしら不可解な、それゆえに彼を悩ませる、そんな闇の世界の女性像になっているのである。

クレールへの思慕とその世界への参入をひたすら求めたニューマンは、「紳士修業のパターン」として、彼女の裏切りによる失恋という厳しい試練を迎える。彼は心から驚き狼狽する。しかし、この自己喪失の事件に遭遇したことがきっかけとなり、自らの求めてきた「えせ紳士」の虚像性に彼は気づく。そして深い自己省察を行なう。この時、彼は自らの持つ「不変的で完結したもの」としての「アメリカ的性格」の価値を認識する。しかし、その

「アメリカ的性格」は、Jones が論文の中でくり返し攻撃した、あの 'innocence' そのものではなくて、これまでは全く縁のなかった初めての「幻滅」という試練を通じて、彼がついに発見した「変容したイノセンス」である。'one of the large and easy impulses *generally* characteristic of his style'¹⁵⁾ が、彼のこのような「個人的な」人間形成の旅を通じて、却ってますます「一般的な」特質のものとなったのである。

ニューマンの復讐からの「断念」は、クレールの結婚からの「断念」と共に、この作品の核心ではある。しかし、道徳的葛藤によって「断念」に至らしめることの妥当性が、ニューマンに対して作者によって与えられたキャラクターライゼーション（静・不変の相）からの必然的帰結とは思わない。先に述べたように、本来の彼の性格は、あくまで「負」のイメージの 'magnanimity'¹⁶⁾ であった。これが「正」のイメージに変容したのは、彼の「人間形成の旅」の過程の中においてである。彼が復讐を「断念」するのは、既に彼は成長していたからである。公爵夫人に秘密を暴露してもどうなるものでもないということを、彼はわかっていたのである。ただし、テキストでは、公爵夫人に訴えるという自分の用向きの愚かさに突然気がつき、精神的なとんぼ返りを打ったという表現になっている。

A singular feeling came over him — a sudden sense of the folly of his errand.... He seemed morally to have turned a sort of somersault, and to find things looking differently in consequence. (Ch. 25)

これは、あくまで作者ジェイムズの「ひらめき (revelation) の人」としての特質が、ニューマンにも付加されている一例である。この啓示の型は、既に第2章で、ペテンにかけられた男への復讐の突然の「断念」というエピソードで現われているし、実際、この型は、ジェイムズの、この作品に対す

るモチーフでもあったのである¹⁷⁾。

この啓示の型を、筆者は積極的な価値として評価したい。不変で固定した典型的性格の基礎を成しているイノセンスを、主人公の精神発達という動く相の中に置くことによって、元来固定的であるはずのイノセンスを何とかして「変容したイノセンス」にする為には、理屈では割り切れない、非常に感覚的な要素の手を貸らないではいられないのである。その役目を果しているのが、作者と主人公に共通の「ひらめきの型」の導入である。この「ひらめき」の場面のリアリティーが主人公の性格に支えられているという解釈ではなくて、本来変わることのないとされる典型的性格の本質的変容を支えているのが、理屈では割り切れない「啓示のパターン」である、という解釈である。こうした効果に支えられて、ニューマンの性格はより一層真実味を帯びるのである。

「紳士」と「ダンディー」との区別さえつかず、ひたすら己の信じた「紳士像」を求めて出発したニューマンの旅も、結局は幻滅に終わるのであるが、その幻滅を通じて「紳士であること」の意味を彼は了解したのだと思う。事的一切を了解してしまった後のニューマンの復讐からの「断念」は、必然の相を呈している。「人物典型の不変性」という相に「変容」の相を加えることによって、より一層堅固な不変的性格の典型（本質的アメリカ的性格）を効果的に生み出すのである。このようにしてニューマンは、人間形成の旅（動の相）を通じて、確固たる性格（静の相）を獲得したと言えるだろう。クレールの「断念」、ヴァランタンの死、トリストラム夫人の‘vicarious’¹⁸⁾な経験など、これらはニューマンの「人間形成の修業」にとって、正に教師の役目を果たしたものだと思う。そういう意味では、やはり、動き変化するニューマンに対して、彼らは変化しない世界の人物だと言える。そして、動き、変化し、発展するニューマンは、最後に、自己の内部に、動くことのない確固たる性格を獲得するのである。

注

- 1) ここで用いたテキストは、*The American*, with Introduction by J. W. Beach, Holt, Rinehart & Winston, 1949. これは1877年の初刊本を底本として再刊されたものである。1907年のジェイムズ自身の最終改訂本であるニューヨーク版ではない。
- 2) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (Penguin Books, 1974; first published 1948), pp. 164-165.
- 3) *Loc. cit*
- 4) テキスト第16章では公爵夫人が 'légende' (legend) 「伝説」という言葉で呼ぶ。
- 5) クレールの場合は逆に、「翼をたたんでいる」(Madame de Cintré bows her head and folds her wings.) (Ch. 6)。両人物の違いがわかる。
- 6) テキスト第5章で、過去との断絶のあるニューマンの気持ちに言及している。(They seemed far away now, for his present attitude was more than a holiday, it was almost a rupture.)
- 7) Cf. 川本静子『イギリス教養小説の系譜』(研究社、1973)
- 8) Granville H. Jones, *Henry James's Psychology of Experience* (The Hague: Mouton, 1975)
- 9) クレールの場合は、「変わることができない」(I can't change!) (Ch. 20) と言う。対照的である。
- 10) Granville H. Jones, *op. cit.*, p. 217.
- 11) *Ibid.*, p. 209.
- 12) *Ibid.*, p. 208.
- 13) テキスト第8章で、ヴァランタンとの会話の中で、'noble' という言葉に関して、ニューマンは意味を取り違える。'noble savage' の体現者た

らんとしているニューマンは、当然その意味に解する。ヴァランタンは「貴族の」という意味で使っている。‘noble’を裏づけるべき証拠は何かと問うヴァンランタンは、やはりニューマンとは違う世界の間人だということがわかる。

14) R. P. Blackmur, ed., *The Art of the Novel; Critical Prefaces of Henry James*. Scribner's, 1962, pp. 38-39.

15) *Ibid.*, p. 22.

16) *Loc. cit.*

17) 「序文」によると、作者は、たまたまアメリカで鉄道馬車に乗っていた時、「異国にあって、貴族社会に出入りしているうちに、悪だくみにあってだまされ裏切られた一人の同国人」が当面する問題を一つの物語にしようと思いついたという。このように、ふと頭に浮かんだ思いつきが動機となり、小説を仕立てていく場合がジェイズには多い。ちょっとしたうわさ話のような germ がだんだん膨らんで行って一つの小説ができ上るという作法である。*The Ambassadors* (1903) などその典型的な作品である。この revelation 型のドラマは、それゆえ、ある決定的瞬間に急に主人公の内面に入り込んでしまう為、意識の外に見られるものとしての実際の演劇とはやはり違う。1890年の劇作版が失敗したゆえんである。「ひらめき」で大切なのは、その「ひらめき」がプロット全体にまで及ぶか否か、つまり、全体が明らさまに見透せたかどうか、リアリティーの底まで見えたかどうか、という事だと思ふ。ジェイズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の ‘epiphany’ (エピファニー) の場合には、例えば『ユリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) という作品が、ひとつのエピファニーの発展成長と考えるのか、それともエピファニーの寄せ集めと考えるのかという問題が生まれてくる。ジョイスに比べてジェイズの場合は、少なくともより一属意識的に関係 (relations) を

志向した作家だと言える。ジョイスの場合はその辺のところが難しい。

18) Granville H. Jones, *op. cit.*, p. 214.

第 18 章：英語教育における英文学研究の意義

1.

『英語年鑑 2000』（研究社）の「イギリス小説の研究」欄担当の鈴木建三に拠れば、日本の英文学研究者を取り巻く現今の学問的風土は、「何をコミュニケーションするかは念頭にない」、凄まじいまでの「コミュニケーションブーム」に席卷されており、本来のなすべき英文学研究を忘れてしまった「コミュニケーション屋さん」ばかりが横行しているとのことである。

言われてみればなるほどその通りかも知れず、私たち英文学徒にとっての精神的支柱ともいえる、あの権威ある学術雑誌『英文学研究』（日本英文学会編集発行）さえもが今年年々掲載論文数の減少に頭を悩ませているようで、事実その雑誌の体裁たるや見た目にも貧相な姿をさらけだしている。昭和 50 年代初頭の英文学研究華やかなりし頃にこの世界に入った者から見れば隔世の感がある。だからであろうか、日本英文学会の *Newsletter* (No. 90, 2000 年 11 月 8 日) の巻頭言において國重純二会長（当時）は、「英文学会の活性化について」と題した文章をわざわざ物し、そこで「憂慮すべき事象」に対する「打開策」を必死に模索しておられる。

かつての「英文学研究」と「英語教育」との位置がすっかり入れ代わってしまったのであろうか。現に、鈴木建三が嘆くところの「コミュニケーションブーム」の正にそのキーワード「コミュニケーション」こそ、日本の中学・高校、そして大学をも含めた英語教育の現場の第一義的な目的となっており、これに異を唱えることなど到底不可能なほどの勢いを見せている。このように、「コミュニケーション」、すなわち「言語の伝達機能」の

促進こそが英語教育の主たる業務と相成った今、英語教育の専門家ならいざ知らず、英文学研究者までもが英語教育の領域にわれもわれもと踏み込んでせつせとその種の英語教育の論文ばかりを執筆していることを正統派の英文学者・鈴木建三がしんそこ憂えて嘆いて書いたのが、あの『英語年鑑2000』（研究社）の中の文章である。

歌を忘れたカナリアの如く、大方の日本の大学の英語教員が今ではすっかり「コミュニケーション屋さん」に成り果ててしまい、日本において明治以来連綿と続いてきた英文学研究という貴重な文化遺産の継承を彼らは忘れてしまったと鈴木建三が嘆く、英語教育界の現状の確認作業をしつつ、それでもこのような状況下においてさえ英文学が今なお果たしうるにちがいない、いや今だからこそ成しうるであろう役割について以下で論じていきたい。

2.

英文学者・鈴木建三が皮肉まじりに言う「コミュニケーション」という片仮名文字が英語教育の分野で頻繁に使われるようになったきっかけはおそらく、1989年（平成元年）3月告示の中学校、並びに高等学校の学習指導要領の「外国語」の「目標」の中でその言葉が使用されたことに拠るであろう。

外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う。（これは中学校の学習指導要領であるが、高等学校のものもほとんど同じである。）

しかし実はこれには背景があり、なぜ上述の如く学習指導要領の「外国語」の「目標」の中で片仮名の「コミュニケーション」という文字が突如使

われるようになったかをさらに探ろうと思えば、私たちは昭和59年（1984年）にまで遡らねばならなくなる。簡潔に経緯を紹介すれば以下になるだろう。

1984年（昭和59年）9月、時の内閣総理大臣中曽根康弘氏は教育問題に関して「臨時教育審議会」に諮問し、1985年（昭和60年）6月「臨時教育審議会」は第一次答申として8項目を出し、そのうちの一つが「国際化」への対応であった。そしてこの「国際化」への対応をめぐる両者間で何度も諮問と答申が繰り返され、1987年（昭和62年）8月の第四次答申、すなわち最終答申の中で、「英語教育においては、広くコミュニケーションを図るための国際通用語習得の側面に重点を置く必要がある」という考え方が片仮名文字の「コミュニケーション」を使って強調されたのである。これが1989年（平成元年）3月告示の中学校、並びに高等学校の学習指導要領の「外国語」の「目標」の中の「コミュニケーション」という片仮名文字表記に大きく影響を及ぼしたと見てほぼ間違いはなかろう。蛇足ながら、それから約10年後の1998年（平成10年）12月告示の中学校学習指導要領の、そして1999年（平成11年）3月告示の高等学校学習指導要領の「外国語」の「目標」の中においても、それがむしろもっと強調される形で片仮名文字の「コミュニケーション」がそれぞれ二回ずつ使用されている。

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。（これは中学校の学習指導要領であるが、高等学校のものもほとんど同じである。）

次に、大学部門における片仮名文字の「コミュニケーション」使用に関しては、この際一番身近な、わが関西大学の一連の外国語教育をめぐる動き

(当時)を概観することによってそれに代え、このことによってほぼ日本の大学の全体像をも類推できるのではないかと思われる。大学設置基準の改正、すなわち大綱化の時代を迎え、1991年(平成3年)7月、当時の大西昭男学長が関西大学の外国語教育について、二つの委員会、すなわち「教学充実検討委員会」と「一般教育等検討委員会」とに諮問し、前者は1993年(平成5年)2月に、そして後者は1994年(平成6年)9月にそれぞれ答申を出す。前者の答申においては「外国語教育センター」案が、後者の答申においては「外国語教育研究所」案がそれぞれ登場し、これらが2000年(平成12年)4月発足の「関西大学外国語教育研究機構」の礎となったことは周知の事実だが、それら二つの答申の中で片仮名文字の「コミュニケーション」が使用されたのは時代の流れから見て当然のことであった。そしてわが関西大学のみならず、この頃から急に全国津々浦々の日本の大学に「コミュニケーションブーム」が沸き起こるのである。

そしてとうとう今では大学院レベルにおいてさえこの現象がみられるようになった。これも身近なわが関西大学の例を引けばよくわかるであろう。2000年(平成12年)4月に関西大学大学院文学研究科内に増設された「外国語教育専攻」(修士課程)の「増設趣意書」の「目的」の冒頭に、「急速に進展する国際化により、社会生活の諸領域における外国語でのコミュニケーション能力や異文化対応能力の必要性が、各界の指導層のみならず一般市民の次元でも認識されるに至っている」と記され、この「コミュニケーション」というキーワードは以後20回以上も登場する。これは、方法論もすべてしっかりと確立した歴史と伝統のある既存の「英文学専攻」や「仏文学専攻」などとは違って、時代の流れとニーズに則した学問体系をこれから新たに構築せねばならない立場の「外国語教育専攻」ゆえの宿命であろうと思われる。新しい時代の息吹のなかで成長していくことになる「外国語教育専攻」は、ゆえに今後もずっと、時代が求め続ける「コミュニケーション」と

という言葉と概念と共生していくことになるだろう。

これまで述べてきた学校教育のレベルをはるかに越えた、国民的立場からの英語による「コミュニケーション」能力の重要性をもっと明確に、かつ鮮明に前面に押し出したのが、「21世紀日本の構想」懇談会（小淵恵三元首相の私的諮問機関・河合隼雄座長）の「報告書」（平成12年1月18日）であり、ここで英語の「第二公用語」化という提案が盛り込まれた。これは、インターネットの普及によるグローバリゼーションに日本が遅れをとってはならぬという危機感からの産物のようなのだが、産経新聞の「正論」欄で評論家松本健一が指摘してくれるように、これは必ずしも懇談会メンバー全員一致の意見ではなかったようである。第4分科会座長の川勝平太・国際日本文化研究センター教授（当時）などは、少なくともこの提言には反対だったようである。常日頃、みごとな平衡感覚に支えられ、物事の本質にしんに迫る著作活動をする、今や日本のオピニオン・リーダーのひとりに目される川勝平太（現在、静岡県知事）のことだけに、松本健一の文章を以下に引用するのも決して無駄ではないだろう。今後この英語第二公用語化という問題を考察する際に、一方では早くから英語公用語化を提唱している朝日新聞編集委員の船橋洋一の動向が、そして他方ではこの川勝平太の今後の発言が私たちに参考になるにちがいない。

しかし、川勝氏はむしろ、英語公用語化に対しては大反対であり、みずからの第4分科会以外の報告については、一切あずかり知らない。『報告書』の英語第二公用語化を含む「総論」は、事務局（山本正幹事＝日本国際交流センター理事長）が勝手につくったものだ、と憤慨していた。（産経新聞、「正論」、2000年4月14日）

3.

上で述べたいいくつかの身近な例からもわかるように、現在日本の英語教育の分野では、「ことば」、すなわち「英語」は、「コミュニケーションの手段・道具である」という認識に立ち、「英語教育」は、生徒や学生に、ひたすらその種の道具や装置をきちんと身につけさせることを己が任務と考えるようになった。これは言語の持つ伝達機能を最重視した考え方である。これに異を唱えるつもりは毛頭ないが、昨今の実用的側面が濃厚な英語教育の流れの中であって、かつて日本で一世を風靡したことのある、あの「英文学」の底力を何とかして活かす手立てはないものかと筆者は思わずにはいられない。今流の「英語教育」もさることながら、「英文学」だって、否、「英文学」こそ、「英語教育」で身につけたはずの道具や装置の、さらに一層上手な使い方の可能性を教えてくれるのではないだろうか、と筆者は秘かに「英文学」に対して期待すらしてしまうのである。言い換えれば、文学ほど、「コミュニケーション」の真の醍醐味を私たちに教えてくれるものはない、ということになる。文学こそが、人間と人間の「コミュニケーション」の複雑さ、奥の深さを真に認識させてくれはしないだろうか。

別の表現で言えば、言葉がわかればすべて意味が通じるとは必ずしも言えないという、至極当たり前のことを文学は私たちに教えてくれるのである。「人間と人間のコミュニケーションは本当に難しい。そこには、ミステリーや謎解きの要素も入る。相手の真意・答えはあっさりとは手に入らない。しかしこちらが相手に求めているのは一つの真実である。言葉をひたすら探求することによってはじめて、より深い理解、そしてその真実に達することができるという、まさにコミュニケーションの醍醐味を文学が私たちにわからせてくれるのだ」、と言い直しても良いだろう。

コミュニケーションの手段・道具としての「英語」を身につけること—もちろんこれが「英語教育」の基本であることは間違いないが、その応用篇と

しての文学の利用の仕方を筆者としては敢えて考えたいのである。

具体例として、アメリカ生まれで死の前年にイギリスに帰化した英文学の巨匠ヘンリー・ジェイムズ（Henry James, 1843-1916）の円熟期の作品『鳩の翼』（*The Wings of the Dove*, 1902）のクライマックスに向かっていく段階を取り上げて考えてみたい。ケイト（Kate Croy）とデンシャー（Merton Densher）の裏切りを知った後のヒロイン、ミリー（Milly Theale）の真意や行動というものは、読者に対して直接に語られることはない。ただし、ケイトとデンシャーに裏切られたにもかかわらず彼らになぜ遺産を残そうとしたのかについてのミリーの真意を知る手掛かりが一度だけ、ミリー直筆の手紙という形で読者の前に提示されかかったことはあるが、ケイトが火の中にその手紙を投げ込んでしまったことによって、ミリーについての情報は読者の前からすっかり絶たれてしまった。

ミリーは死に至るまで読者の前から完全に姿を消してしまう。だから、読者にとっては、ミリーに関する情報はすべて伝聞情報でしかありえなくなる。すなわち、他の登場人物を通じてのみミリーについて私たちは知り得るのだ。ところが皮肉なことに、ミリーについての情報を伝える役の人物たちの行動も実はとても曖昧である。たとえばその一人デンシャーは、ミリーについてのみならず、己自身についても何一つわかってはいない人物なのだ。私たち読者は、それゆえにもどかしい思いをせざるをえない。

では一体誰が、読者が感じるこのもどかしい思いを払拭してくれるのかと言えば、それはケイトである。ミリーを裏切って、自分の野望をほとんど叶えたかに見えたケイトが、一番大事な愛、すなわちデンシャーの愛を失ったことに気づいた瞬間、これまで読者の前に伏せられていた曖昧なミリーに関する情報を、わからないままにいるデンシャーにまるで突き付けるが如く、明確に解き明かす。一見悪役のあのケイトが、私たちに伏せられていた情報を、つまり物語の真の意味を教えてくれたのである。換言すれば、ミリーに

対して仇役のケイトが、ミリーを傷つけたケイトが、実は一番ミリーを理解したとも言える。悪魔が天使を一番よく理解したと言ってもよく、私たちは悪の貫禄さえケイトに感じてしまうほどである。

繰り返しになるかもしれないが、「情報」という言葉を使ってもう一度まとめ直すと次のようになる。ミリーの真意、すなわちミリーについての情報は、本人が自分の口からは一切語らないので、読者には伏せられたままになっており、彼女に関する直接の情報は皆無である。ケイトとデンチャーとの対話を通じて間接的にしかその情報は伝わってはこない。ところでそのミリーについて間接的に読者に語るデンチャーの情報はたとえば、全く整理されてはおらず、混乱したままで、大変乱れてしまっている。だからこのような人物デンチャーが語るミリー像について、読者が混乱状態に陥ってしまい、理解できないのは至極当然のことである。ところがこの混乱状態のデンチャー情報を、みごとにきちんときれいに整理し直してくれるのが、謀略の中心人物ケイトである。ケイトは、デンチャー情報を整理し、それによって読者はひとまずデンチャーについての情報がわかってくる。そしてこのことによってさらに、一番奥にある謎めいた、おぼろげなミリー情報の手掛かりが読者に暗示的に伝えられる。

作品『鳩の翼』は、上で述べたような段階・プロセスを経て、やがてすべての「情報」が明らかにされてゆく、つまり謎が解けてゆく、そんな「コミュニケーション」の構造を持った文学作品だと筆者は思う。作品と読者の、作者と読者の「コミュニケーション」が、このような重層的な段階を経てはじめて成立するという、そんな作品だとも言えよう。

「英語教育」の応用篇としての文学の利用の仕方を考える立場の筆者は、フィクション上で体験する人間の心の謎解きのプロセスは、現実の人と人との「コミュニケーション」の促進にもいくらかは役立つのではないかと堅く信じている。またそれだからこそ筆者は英文学の作品世界にも耽溺してしま

うのかもしれない。

4.

英語教育は、言葉の持つ、事実や意味を明確にわかりやすく伝える力に一層の力点を置くが、文学の場合は、言葉の持つ、むしろ逆の力、すなわち、事実や意味をますますわからなくさせていく力、理解をより難しくさせる力に向かう傾向がある。現に文学作品読解を通じて日々私たちが感じることは、情報をストレートに伝えることではなく、むしろ情報をより錯綜させ、複雑にさせ、理解させまいとする、そんな言葉の持つ魔力である。それと向き合い、やっとのことで真実を理解できた時、私たちは文学の醍醐味を感じるのだ。喩えて言えば、迷路からやっと抜け出した時に味わう、あの解放感と喜びと言ってもいいだろう。

文学作品の作者は、言葉によってどんどん要点をぼかしてゆき、語り尽くさずに読者をじらし続ける。現にヘンリー・ジェイムズは作品『鳩の翼』で、間接的な回りくどい表現法を採った。これに対して読者は、なんとかしてそこから一つの真実を引き出すべく格闘する。作品と読者の「コミュニケーション」は、こうした苦難の末に成立するのだ。

「語ること」ではなく、むしろ「語られないこと」に値打ちがあることを、そしてそこに深みがあることを、文学は私たちに教えてくれる。このことを、英語教育の要諦として英文学サイドから英語教育関係者にも訴えていきたい、と秘かに筆者は思っている。

文学作品ではないが、例えばジョージ・スタイナー (George Steiner) の『言語と沈黙』(*Language and Silence*, 1967) なども一読する価値があり、それによって、本質的に言語中心の性格を持っているヨーロッパ文明の中にあつて、言葉に基づかずに沈黙に根ざす精神活動があることも教えられ、私たちの「コミュニケーション」の捉え方にも厚みが増すだろう。

実践的「コミュニケーション」能力の養成がひたすら重視される現在の英語教育の風潮の中であって、「コミュニケーション」の不毛に苦しみ、具体的な人間関係の中に入り込めないでいる若者たちの青春群像を描いた名作として日本のものでは私たちはすぐに村上春樹の『ノルウェイの森』（講談社、1987年）を思い起こすが、人と人との「コミュニケーション」の複雑さを思い知らされる英文学畑の作品群としては、やはり今回取り上げたヘンリー・ジェイムズの一連の小説がその筆頭となるであろう。なぜなら総じてジェイムズ文学の真骨頂は、登場人物たちの内面世界のドラマにあるからだ。

言語学者・滝浦真人は著書『お喋りなことば—コミュニケーションが伝えるもの』（小学館、2000年4月1日）の中で、「コミュニケーションは何を伝えるか」と題して、言葉の諸相と諸機能とについての的を射た記述をしている。

コミュニケーションが伝えるもの。それは決して“情報”だけではありません。ときにそれは、言葉にならない“感情”を伝え、あるいはまた、情報以前の“力”を伝えます。

コミュニケーションの中心にあるのは情報を担う＜言葉＞ですが、しかし、＜言葉＞がコミュニケーションのすべてであるわけでは決してありません。私たちが生きているのは、＜言葉＞をその頂点に置きながらも、何よりもまず人と人とが関係を結ぶための活動であり行為であるようなくことば＞の世界だからです。

そうした、＜言葉＞よりもはるかに広大な領域をもつものとしてコミュニケーションを捉え直してみると、今度は＜言葉＞そのものの中にも、単に“情報”の一言では片付かない実に多様な要素が見えてきます。問題は、言葉が何を伝えるかにではなくて、言葉の中に何を見るかにあるとも言えそうです。

そのときに見えてくるもの、それこそがコミュニケーションが伝え

ているものにほかなりません。[前掲書、pp. 232-233]

「コミュニケーション」という言葉と概念を幅広く多角的に捉える滝浦真人のこのような言説に触れるにつけ、ますます筆者は、言葉の持つ魔力をいっぱい秘めた英文学作品読解の意義を再認識し、「英語教育」の応用篇としてのこうした英文学の利用の仕方を考えてみたいという思いはますます募るばかりである。

冒頭で、日本の英文学研究の凋落ぶりを嘆く英文学者・鈴木建三の発言を紹介したが、実は、この現象はもっと凄まじいものらしく、雑誌『文学』（2000年5・6月合併号、岩波書店）はとうとう「いま英文学とはなにか」という特集を組んだほどで、論者たちの苦渋に満ちた顔つきが窺われる。さすがに俊才の富山太佳夫はそこで事の本質を看破しており、英文学研究の本場が英米にあるという至極当然の事実こそがすべての問題の元になっていると言う。まさしくその通りだと筆者も思う。だから恥ずかしながら筆者はと言えば、この世界に入った当初から括弧つきの「日本における」英文学研究のありようを一貫して模索してきたのである。その実践篇の一つが今回披露した、「英語教育」の応用篇としてのものである。

さらにもう一つ全く別の角度から、筆者は、例えばブロンテ姉妹の作品を読みながら、「日本における」英文学研究の意義として日本の戦後教育の中で忘れられてきた人間の魂への着目の必要性を考えているが、これについては別の機会に論じたいと思っている。「英語教育」の今後の発展にとっても、「英文学」はこれまで以上に活性化してもらわねばならない。本章における実践例がその一翼を担えられたらと願わずにはいられない。

第 19 章：英文学研究と言語意識

1.

イギリスの作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) は、1842 年 1 月から約半年間アメリカ旅行に出かけ、その見聞録 *American Notes* を 1842 年 10 月に 2 巻本にまとめて刊行した。

30 歳の若きディケンズがアメリカ体験から何を得たのか。これに関しては川澄英男の『ディケンズとアメリカ—十九世紀アメリカ事情』(彩流社、1998 年) が大変詳しい。特に第 5 章で川澄は、ディケンズのアメリカへの旅は自分自身への旅、すなわち自己発見の旅であり、ディケンズはイギリスの古き良き伝統を再認識したのだと述べ、このアメリカ訪問がその後の作家としての成長に大きく寄与したであろうと断を下す。ディケンズ文学研究の観点からだけでなく、英語教育における異文化理解の点からも、『ディケンズとアメリカ—十九世紀アメリカ事情』は一読の価値があるだろう。

ところで、ディケンズのこの *American Notes* には、文化的側面からの記述だけでなく、かの地でディケンズが実際に耳目に触れ、そのつど尋常ならざる関心を抱いたイギリス英語とアメリカ英語の相違が詳述されている。言葉の魔術師ディケンズがアメリカ英語に大いに食指が動いたであろうことは全く想像に難くはない。たとえば“fix”の語法に関してディケンズは、友人のジョン・フォースター (John Forster, 1812-1876) に宛てた手紙の中でも、*American Notes* に記したのと同様のものを繰り返し綴っている。よほど印象深かったに相違ない。

2.

アメリカ英語の口語用法“fix”についての記述は、*American Notes*の特に第9章から第10章にかけてなされている。

第10章でディケンズは、この“fix”という言葉ほどアメリカで重宝される言葉はなく、これはアメリカの語彙の中の“the Caleb Quotem”（「なんでも屋」）だと言う。具体的には、外出前の「支度中」（“fixing oneself”）や、「食卓を準備中」（“fixing the tables”）や、荷物を「まとめる」（“fix”）や、医者が患者を「治療する」（“fix”）や、ワインが「飲み頃」（“fixed properly”）や、生焼けではなくてきちんと「調理された食べ物」（“fixing God A'mighty's vittles”）や、乗客同士でうまく席を「つくる」（“fix”）といった用例を出している。これらの言葉に触れた際のディケンズのはしゃぎぶりは、フォースターに宛てた手紙からも窺い知れる。筆者には何とも微笑ましく思われる。

第9章では、イギリス人が“All right!”と叫ぶようなとき、アメリカ人は“Go ahead!”と叫ぶのだと言い、これは国民性の違いを表していると言っている。ディケンズは推し量る。

第8章では、「ズボン」を意味する“pants”という語彙をディケンズは上述の“fixed”と共に出している（... pants are fixed to order...）。そして“fix”は、この章の別の箇所でも登場する（...“to fix” the President...）。

第2章には、“right away”と“directly”が同じ意味だとわかって驚愕するディケンズの姿が克明に描かれている。ディナーをめぐってホテルの給仕とディケンズは言葉を交わす。ディケンズがディナーをできるだけ早くもってきてくれ（“as quick as possible”）と給仕に頼んだのに対して、給仕は“Right away?”と念を押す。ところがディケンズはこの意味がわからず、“No.”と答えてしまう。それを聞いた給仕はわけがわからなくなり、困惑する。別の人物の手助けもあり、やがて誤解は解け、“right away”が実は“directly”（「今すぐに、ただちに」）のことだとディケンズは知る。ディケンズにとっての

“right away” はあくまで「別の場所での食事」の意味だったのである。

3.

ディケンズの言語意識の鋭さに初めて筆者が気づいたのは彼の後期の作品『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861) を読んだときである。トランプの絵札を“Knave”ではなく“Jack”と呼ぶ習わしの労働者階級の主人公ピップ(Pip)に対して、上流階級のエステラ(Estella)が軽侮の念を抱く場面である。

さらにまた、作家の業と言ってしまうとそれまでだが、ディケンズの己がテキストへの拘りぶりにも深い感銘を受けた。一例が最終場面の本文改訂である。小説の文字通り最後の表現において、1861年版のテキストでは“... I saw the shadow of no parting from her.”であったのだが、1868年版でディケンズは“... I saw no shadow of another parting from her.”と書き直している。エステラとの別離が過去に一度あったので作者としては論理の上から“another”を挿入したいと思ったであろうことは推測されるが、熟考を重ねつつ一字一句にこだわり作品と真摯に向き合うディケンズの作家魂に、筆者は「文学」のあるべき姿を見た思いがした。私たちは一読者としてテキストを読解していく立場だが、書く段になればこちらとて、真剣に言葉を紡いでゆかねばならぬとしみじみ思った。

ディケンズにまつわる思い出話はさておき、文学テキストとの対峙からやがて文化としての言語と格闘しながら後世に残る素晴らしい仕事を成し遂げた人に江藤淳がいる。アメリカ文学研究者の異孝之が江藤淳の原点は「英文学者」だと喝破している通り、英文学研究の心を忘れぬまま、文芸評論家として一家を成した人物である。慶應義塾の学生時代に徹底した本文校訂の意義と手法を体得した江藤淳は、その後、『閉された言語空間－占領軍の検閲と戦後日本』(文藝春秋、1989年)を世に問うことになる(初出は月刊雑誌

『諸君!』1982年2月号で、通算六回、同雑誌に連載している)。

GHQによって日本の歴史や文化はいかにアメリカに都合のいいものに取り替えられたかを、検閲文書を解説することによって江藤淳はみごとに解明したのである。この著書は、9ヶ月間ウィルソン研究所で行った検閲研究の集大成だ。江藤淳がここで力説しているのは、GHQによる検閲の影響は決して過去のものではなく、実は今なお日本人の思考形態にとって足枷となっているという指摘である。この本はもちろん江藤淳というひとりの天才が生み出したものではあるが、慶應義塾の英文科の学統ともいべき緻密なテキスト読解の研究手法がDNAとして彼の身中にきちんと受け継がれていたであろうことを忘れてはならないだろう。日本の英文学研究界の低迷ぶりが囁かれて久しいが、今こそ、江藤淳が成した業績に思いを馳せるべきである。

4.

筆者は、英文学系の学会の講演で、「現在の英文学を総合人間学のような領域に思い切ってシフトさせたらどうだろうか。言葉だけでなく、言葉によって伝えられる情報や意味を前面に押し出したらいい。言葉を発している人間に興味を持ち、その人間が創出した文学世界を通して人間教育に向かうのが良いだろう」といった趣旨の話をしたことがある。それが英文学研究界の生き延びる道だと信じたからである。ただその際、何度も強調したのは、英語であれ日本語であれ、やはり研究姿勢の基本は言葉にこだわるという点だ。これを怠ってはいけない。私ども英文学徒が死守すべき最後の砦である。

手元に1967年(昭和42年)の比較文学者・太田三郎の随筆「女子学生の卒業論文」(『群像』三月特大号)がある。太田は、日本文学専攻学生の論文は文藝時評風の読後感的なものに陥りがちだが、外国文学専攻の学生の場合には理論的分析的な批評になりがちだと言う。これは40数年も前の一例だが、

案外今も変わってはいないだろう。日本文学とは違って、言語・文化両面において初めから距離がある外国文学研究は、不即不離の立場を取り、言語分析から入って行かざるをえないのは自明の理である。そしてこれが実は私たちの武器にもなりうるのだ。緻密な言語分析は遠く離れた場所にいる者に許された強みでもある。

本場英米の英文学研究の先細り現象を嘆くジョージ・スタイナー（George Steiner）のメッセージが現在の日本の英文学徒にとってはカンフル剤となるだろう。スタイナーはカフカ（Kafka）からの引用を使い、「本」を読むことの大切さを説いている。英文学の本場である英米の大学英文科においてさえ、活性化のためには今やひたすら本を読むことが必須だとスタイナーは説く（A book must be an ice-axe to break the sea frozen inside us.）（George Steiner, *Language and Silence*, Faber & Faber, 1967）。

英語圏から遠く離れた日本で英文学研究に勤しむ者の務めは、先達の優れた知見に謙虚に耳を傾け、言語意識をさらにいっそう磨くことではあるまいか。

第20章：ブロンテ姉妹は われらが救世主たりうるか

1.

「文学」、特に「外国文学」、そしてその中の一つ「英文学」の存在が、今、日本の大学においてはとても危うくなっているような気がしてならない。「英文学」を再生させるための処方箋はいろいろと考えられるが、本章では、「ブロンテ姉妹」の力を借りることによって「英文学」を活性化させることが可能かどうかを考証してみたいと思う。「ブロンテ姉妹とその文学」が日本の「英文学研究界」にとってのカンフル剤になりうるか否かの検証、と言っても良いだろう¹⁾。

2.

「英文学」不振の原因の一つとしてまず考えられるのは、日本の大学を取り巻く状況の変化である。ますます大衆化が進み、今や大学がすっかり様変わりしてしまったのだ。1949年（昭和24年）新制大学制度発足時の4年制大学の数は178校（短期大学は0校）であったのが、1999年（平成11年）では622校となり、短期大学の585校と合わせると、1200校以上にもなる。これに対して、18歳人口はどんどん減り続け、今や150万人台にまで落ち込んでしまった。第1次ベビーブームの1966年（昭和41年）度の約250万人、そして第2次ベビーブームの1992年（平成4年）度の205万人に比べればこの差は一目瞭然である。ところが大学進学率は急激に上がってゆき、2002年（平成11年）度は49.1%となった。このように大学の大量化が定着

した今、巷間に流布している大学生の学力低下の風評もあながち間違っているとは言えなくなった²⁾。

「英文学」の存在をこれまで背後でしっかりと支えてきた「文学部」のありようも同様に変わり、かつて有していた文学部特有のカルチャーといったものが今や希薄になってしまった。時の移り変わり、こればかりは如何ともしがたい。なぜなら、実業界に十分な余裕があった頃とは違い、経済的不振に陥った今、企業側は即戦力を求めざるを得ず、それに応じて大学の「文学部」も「実利教育」に重点を置かざるをえなくなった。そこで「文学部」の「英文学科」も、自ずと「英文学」から「実用英語」へと比重を移し変えることになる。これまでのように悠長に「英文学」などと言ってはおられないのだ。

されど同じ「文学部」なのに、「英文学」のような外国文学系ではない、たとえば哲学とか美学とかいった、現実の経済界とは直結しないはずの、むしろひたすら「知」の探求を目指す学問領域が一方ですます受験生の脚光を浴びている実状を目の当りにする時、私たちはこれをどう解釈していいのか思いあぐねてしまう。先人たちによって育まれてきた文化遺産に畏敬の念を抱き、「学問をすること」自体に喜びを見い出す、そんな若人たちが「文学部」に集い、研究成果を後代に伝えるべく「知」の探求に励んでいるその姿を見る限り、「文学部」はきちんと機能していると言わざるをえない。だとすれば、低迷ぶりが著しいのはひょっとして「英文学」のような外国文学系だけなのだろうか。

『英語年鑑 2000』（研究社）の「イギリス小説の研究」欄担当の英文学者・鈴木建三は、そのエッセイの中で、日本の英文学研究者を取り巻く学問的風土は、何をコミュニケーションするかは念頭にない、すさまじいまでのコミュニケーションブームに席卷されており、本来のなすべき英文学研究を忘れてしまったコミュニケーション屋さんばかりが横行していると述べ、いかにも正

統派の英文学者らしくこの現状をしんそこ憂えて嘆く。実際、「コミュニケーションブーム」が中学・高校のみならず大学の英語教育界をも席卷したことは、大学の教育現場にいる人なら誰もが認めることであり、日本において明治以来連綿と続いてきた英文学研究の行く末を案じるのはひとり鈴木建三だけではない。

しかるに、日本の英文学不振の原因は、時代の移ろいにあるのではなく、もっと本質的なところにあるのだ、と看破している人も少なからずいる。そのひとり宮崎芳三は『太平洋戦争と英文学者』（研究社、1999）において、学問としての英文学研究の始祖・斎藤勇の仕事の中味を吟味した結果、日本の英文学研究は本来的に脆弱なものであり、そこに見られるのは「勤勉」だけで、自分自身を見失った国籍喪失の傾向が顕著だ、と言い切る。

柄谷行人は『反文学論』（冬樹社、1979）の中で、英文学畑では三人の批評家は別として、ほとんどの英文学者に接するとすぐに愛想が尽きた、と告白する。そしてその例外的な三人の批評家として柄谷は、福田恆存、江藤淳、吉田健一の名を挙げる。

上記の宮崎芳三によって「自己の尊厳を保ち得た英文学者」と高く評価された福原麟太郎は、英文学研究が本来的に包含しているこの種の脆さをおそらく熟知していたに違いなく、表現の底にある言霊の域にまで達するよう努力しさえすれば、夏目漱石がかつて英文学に対して抱いたような不満は解消されるのだと主張し（『福原麟太郎著作集 10－英文学評論』、研究社、1970）、かつそれを実践した。

富山太佳夫は「闇の中の遊園地」と題する論考の中で、日本の英文学研究にとっての困難な状況は、英文学研究の本場が英米にあるという事実に結びついており、日本の英文学者は英米の国文学者と向かい合わざるをえないのだ、と喝破し、同時に、外国で Ph. D を取得する人たちは英米の価値観をあまりにも無批判に受け入れ、それに寸法を合わせるという精神構造を体に刻

みつけてしまいがちだ、と苦言を呈する [『文学』、第1巻・第3号、5・6月合併号、岩波書店、2000]。

日本英文学会会長であった國重純二は、「英文学会の活性化について」と題する巻頭エッセイ (Newsletter, No. 90、日本英文学会、2000年11月8日) において、低迷する英文学研究という「憂慮すべき事象」に対する「打開策」を必死に模索する。このようなことはおそらく前代未聞で、栄華を極めた日本の英文学研究の末路を見る思いで胸が痛む。

筆者自身はと言えば、時代状況の変化という側面からのみならず、「英文学」という学問形態自体に潜む特性の考察からもこの問題に迫らねばならないと思う。まず後者の側面であるが、「英文学」という学問領域はあくまで「英」と「文学」とが合わさったものであり、「英」、すなわち「英語」だけにいくらか関心があってもそれだけでは不十分であり、もう一方の「文学」の方にも或る程度の興味や造詣がなければならぬ。これは言葉を換えて言えば、外の紛れもない物的現実とは違う、もう一つの、内なる心の中の現実への志向が必然的に求められるということになる。このように、「英語」と「文学」の、互いに質の違う二つが同時に求められる時、ややもすれば外の現実のみ関心を向けがちな今の若者にとってその負担たるや並大抵のものではないだろう。現に、かの夏目漱石だってその負担に耐えかねて、「英語」の方を捨て、「文学」にのみ赴いたではないか。「英語」と「文学」の二つをバランスよくさばくことは、言うは易し、行なうは難しである。

ところで前者の時代状況の変化に関しては、既に述べたことと幾分重複するが、ことの善悪は別にして、時代は確実に、「外面世界」に重きを置く流れが優勢である。これは老若男女を問わず、ほとんどすべての人たちについて、またほとんどすべての分野について言えることだろう。実際、大学においてもいつ頃からかは定かではないが、ほとんどの領域において「フィールドワーク」が重視されるようになり、現実にも着した研究方法が幅をきかせ

るようになった。「実証的」という言葉がキーワードになったゆえんである。この傾向はますます強まり、今では「エヴィデンス」がどうの「データ」がどうのといったことばかりが重視される。だからかどうか、福原麟太郎や中野好夫や小池滋といった英文学者がこれまで書き綴ってきた、読み手にとって目から鱗が落ちるような、鮮やかで瑞々しく面白い、そんな味のある秀逸な文章は最近めっきり減ってしまった。少なくともアカデミズムを標榜する分野では残念ながらほとんど見られない。もちろんこの事象をどう判断するかは各自の価値観次第である。

3.

「英文学」という学問形態自体が内包する性質と、時代状況の変化がもたらす側面の両方から、低迷する「英文学研究」の実相を探ってきたが、ここで筆者はオスカー・ワイルド（1854-1900）の例を引き合いに出し、時代に迎合するとはいわないまでも、内面の心的現実を重んじる「文学」の姿勢をひとまず犠牲にしてでも、とりあえず、そして何としてでも「英文学」にかつての元気を取り戻させるための方途を見つけ出したいと思う。

香内三郎の『ベストセラーの読まれ方』（日本放送出版協会、1991）に拠れば、オスカー・ワイルドは作家でありながら、生涯を通じて文字言語そのものに重きを置かず、人間の内面よりも外面を重んじた人だった、とのことである。誰の眼にもはっきりと見える外面の方が大事だと信じ、メディアを泳ぎ渡った人だと、香内三郎は断ずる。

近藤耕人も、香内三郎と同じく、現代作家が変貌しつつあることを感じ取っている。

この見えない世界のつかみどころのなさ、感覚の欠如が、より即物的な、より感覚的な手触りを信じる今日の人びとにとって文学が飽き

足りない理由になってきている。同じような意識をもつ作家たちはより感覚的な世界、より視覚的な世界をイメージで構成しようとする。神のような非人間的、超越的な眼ではなく、現実には生きている人間のなまの感覚による世界とのつながりを失わずにおきたいと思うのである。(近藤耕人『映像言語と想像力』、三一書房、1971、136-137頁)

文学研究の対象には、当然「外面世界」と「内面世界」とが含まれるけれども、従来の文学研究の真骨頂は人間の内面に深く踏み込むことであるように一途に信じられてきた。しかし今、発想の転換と言うほどの大袈裟なことでは決してないが、人間の内面へのアプローチは多少犠牲にしてでも、この際、思い切ってあのオスカー・ワイルドがそうであったように、誰の眼にも一目瞭然な「外面」からのアプローチでも構わないのではないか。文字通り身体を使い、現実には密着したフィールドワークの手法を採ってみるのもいいかもしれないのだ。現にこれは、わが国の国文学者たちが日常的に用いている方法でもある。そしてこの時、私たちにとって幸いなことに、ブロンテ姉妹の文学はこのフィールドワークの手法にまさにうってつけなのだ。以下にいくつか具体例を列挙してみよう。

ハワース牧師館に保存されているブロンテ姉妹にまつわる遺品や展示品のすべてを徹底的に精査していく作業からまずブロンテ王国へ入ってゆくのも一つの方法かもしれない。実際ハワースには彼女たちの手になる絵画や豆本や書簡や日記という原資料がふんだんに残されており、私たちはたっぷりとその恩恵に浴することができるのだ。

また身近なところでは、宝塚の舞台上で上演されたミュージカル『嵐が丘』の検証からブロンテ文学へ分け入るのも良いだろう。太田哲則の脚本・演出で1997年6月に宝塚バウホールで上演された『嵐が丘』の録画ビデオも市販されており、それを利用しない手はない。

漫画にあらわれたものとして、たとえば美内すずえの『ガラスの仮面』を取り上げるのも面白いだろう。ヒロイン北島マヤが、いかにして『嵐が丘』の、子ども時代のキャサリンの役づくりをするかが見どころだ。そしてここに作者美内すずえの『嵐が丘』論がすべて凝縮されている。今の時代と違って、遊び道具も何もない荒野の一軒家に住むキャサリンとヒースクリフにとっては二人が常に一緒にいることが大事なことであり、二人が引き離されることこそが相互にとっての最大の罰である、という解釈にヒロイン北島マヤはたどり着くという設定だが、これは当然ながら作者美内すずえの『嵐が丘』に関する解釈の反映である。その際美内すずえは、原作『嵐が丘』の第5章のネリーの台詞「キャサリンはヒースクリフを好きになりすぎていました。わたしたちが彼女のために考え出した最大の罰は、彼女を彼から引きはなしておくことでした」（中岡洋訳）をきちんと踏まえていることは言うまでもない。こうして美内すずえの世界からブロンテランドに入ってゆくのも愉快ではないだろうか。

もし戯曲好きの人であるならば、河野多恵子の『戯曲 嵐が丘』（河出書房新社、1970）がお薦めである。戯曲の後ろに載せられたエッセイ“「嵐が丘」の超自然性”も非常に読み応えがあり、これで一気にブロンテの文学世界に没入できること請け合いだ〔エッセイ“「嵐が丘」の超自然性”は後に『文学の奇蹟』（河出書房新社、1974）に再録される〕。

ところで河野多恵子の場合、その著作に「ブロンテ姉妹とその文学」が登場することがかなり多く、富岡多恵子との共著『嵐ヶ丘ふたり旅』（文藝春秋、1986）、『文学の奇蹟』（河出書房新社、1974）、『気分について』（福武書店、1982）、『ニューヨークめぐり会い』（中央公論社、1997）、そしてさらには小説『秘事』（新潮社、2000）、また雑誌連載の「現代文学創作心得」（『文学界』、文藝春秋、2001年3月号）などが挙げられる。これらの一連の著作の読破からさらに一步踏み込んで、河野多恵子とブロンテ姉妹の両文学世界

の比較考察へと向かえば、それもまたよし、である。作品『不意の声』（講談社、1968）に見られる日常的リアリズムの世界と夢幻妄想の世界——ここにブロンテ姉妹の影響があるのか否か。これらを探る比較文学的作業も楽しいはずである。

伝記に興味がある人なら、たとえば大久保喬樹の「ブロンテ家の男たち」（『新潮』、新潮社、2000年1月号）や桐生操の「エミリ・ブロンテー実兄との近親相姦も疑われている異才」（『イギリス不思議な幽霊屋敷』、PHP文庫、1999）からブロンテ姉妹の文学世界をのぞくのも一興だろう。堅苦しい学術書からは決して堪能できない味がある。

ヨーロッパ思想、特にフランス思想に関心がある人は、『嵐が丘』を論じたミシェル・シュリアの評論「始まりと終わり、天国と地獄」（中条省平訳、季刊『リテレール』第4号、1993）あたりからブロンテランドに入るのも楽しいかもしれない。これは1991年のソビエト連邦解体後のヨーロッパ思想界の文脈の中で耽読するにふさわしい、示唆に富むエッセイである。

4.

今の若者たちが「外面世界」にばかり目を奪われ、「内面世界」にはなかなか関心を抱いてくれないことが「文学」離れの主要な原因のひとつになっているということは先に述べたが、ここで忘れてはならない大事なことがある。それは、外の現実が見え過ぎる若者たちが大勢いる一方で、内なる現実を引きこもり、ディスコミュニケーションの状態に陥ってしまっている若者たちも少なからずいるという事実である。この種のテーマを追求している数多くの作家のひとりに今は亡き中島梓がおり、彼女の一連の著作、たとえば『コミュニケーション不全症候群』（筑摩書房、1991）や『タナトスの子供たち—過剰適応の生態学』（筑摩書房、1998）などはそのテーマを深く掘り下げたものであるが、その著者中島梓は、「コミュニケーション」をめぐって

の西島建男との対談の中で、「引きこもりが新しい何かを生み出す力になるかもしれない」と、語っている（『論座』、朝日新聞社、2000年10月号、184頁）。

この件を読んだ時、筆者は咄嗟にエミリ・ブロンテを連想した。外界との接触を嫌って30年の短い生涯のほとんどを故郷のヨークシャの荒野に繋がれて過ごした彼女こそ、今で言う「引きこもり」の中からみごとな芸術作品を生み出した人ではなかったか、と。実際そう考えればエミリ・ブロンテは、まさしくわれらが希望の星となる。

この種の角度からすでにエミリ・ブロンテ像にメスが入っているかどうかは知らないが、それこそ前で述べた実証的なフィールドワークの手法を駆使して彼女の実像に深く迫っていくことは大変意味のある作業だと言えるだろう。そしておそらくこれは、社会学、心理学、精神病理学等の諸領域とも絡み、壮大な研究に発展しうる可能性を帯びてくる。これこそ明日の文学研究のありようを示すものなのかもしれない。

テキストとじっくり向き合い、そこから作者の声にじっと耳を傾けるというのももちろん一つの文学研究法である。現に従来の文学研究の主流はこれであった。しかしこの手法で今行き詰まっているとしたなら、こればかりに固執しないで発想を変え、別の道をも考えてみたらどうか、というのが本章の主張である。そしてそれがブロンテ姉妹の文学において実践可能なことを具体的に論じたつもりである。

このように多角的な研究アプローチを許容してくれる「ブロンテ姉妹」こそ、低迷する今日の日本の英文学研究界にとっての曙光、そして救世主と言えるのではないだろうか。

注

- 1) 本章は、日本ブロンテ協会主催の2001年度公開講座（2001年5月12

日近畿大学)での講演原稿を加筆・訂正したものである。

- 2) Cf.『エリート教育は必要か—戦後教育のタブーに迫る』(「読売ぶっくれっと」No. 23、読売新聞社、2000)